

392
212

聖典

全

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



聖
典

序

人生の大事を究明し生死の大問題を解決して、眞實に生れ甲斐のありた生を感謝するにいたり得る事は、萬人の等しく熱望して已ぬ所と存じます。申すまでもなく其境地を開拓する爲には、自らも思索し努力精進もせなければなりません。ここに十分覺悟して、かゝらねばならぬ、最も大切な事は、眞實の師と眞實の教とを撰んで、偏に師教に隨順して、私心なく求道の道程を辿る事であります。

此小編編纂の目的は、全く如上の趣旨に外ならぬのであります。先づ 大聖釋尊の大法に出發し、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然、列祖の教法繼承の歸旨を尋ね、最後に吾親鸞聖人の傳へ給ふ、念佛成佛是眞宗との歸結を明かにせんと試みたのであります。

みだりに經釋の要文を取捨いたしました事は、誠に懼れ多い次第ではありますが、成るべく簡と易とを旨といたしたからであります。末段に跋として聖典拜讀の手引ともなるべき三四の要點を記してをきました。

大正
10 7. 25
内交

392-2/2

聖典

一、勸誠

若し人、善本なければ此經を聞くことを得ず、清淨に戒を有^{たも}てる者、乃^{いま}し正法を聞くことを獲^う。

曾て更に世尊を見たてまつりしもの、則ち能く此事を信ず、謙敬して聞きて奉^た行し、踊躍して大に歡喜せん。

憍慢と弊と懈怠とは以て此法を信じ難し、宿世に諸佛を見たてまつれば、樂^{このん}では是の如き教を聽かん。

— 次 目 —

一	勸誠	一
二	三部經鈔要	九
三	七祖聖教鈔要	六
四	相承	五
五	教行信証鈔要	七
六	唯信鈔、後世物語、自力他力	九
七	慈誨	四
八	跋	三



如來の智慧海は深廣にして涯底なし、二乗の測る所にあらず、唯佛のみ獨り明かに了りたまへり。

壽命は甚だ得難く、佛世亦値ひ難し、人信慧あること難し、若し聞かば精進して求めよ。

法を聞きて能く忘れず、見て敬ひ得て大に慶べば、我が善き親友なり、是故に當に意を發すべし。

設ひ世界に滿てらん火をも必ず過ぎて、要めて法を聞かば、會す當に佛道を成じ、廣く生死の流を度すべし。

二

佛、彌勒菩薩、諸の天人等に告げたまはく。世人薄俗にして共に不急の事を諍

ひ、此劇惡極苦の中に於て、身の營務を勤めて以て自ら給濟す、尊となく卑となく貧となく富となく、少長男女共に念を累ね慮を積み、心の爲に走せ使はれて安き時あることなし。田あれば田を憂ひ宅あれば宅を憂ふ、田なければ亦憂ひて田あらんことを欲ふ、宅なければ亦憂ひて宅あらんことを欲ふ。肯て善を爲し、道を行じ、徳に進まず、壽終り身死して、當に獨り遠く去る、趣向する所あれども、善惡の道能く知る者なし。

人、世間愛欲の中に在て、獨り生じ、獨り死し、獨り去り、獨り來る、行に當りて苦樂の地に至り趣く、身自ら之をうけて代る者あることなし。善惡自然にして、行を追て生ずる所なり。何ぞ衆事を棄て、各強健の時におよんで、努力して善を勤修し、精進して渡世を願はざらん、極長生を得べし、如何ぞ道を求めざらん何の樂をか欲はんや。

世人、善を作して善を得、道を爲して道を得ることを信せず。人死して更に生れ、惠施して福を得ることを信せず、善惡の事すべて之を信せず、之を然らずと謂へり。

先人祖父、素より善を爲さず、道德を知らず、身愚に神闇く、心塞り意閉ぢて、死生の趣、善惡の道、自ら見ることも能はず、語る者あることなし。吉凶禍福競ひて各之を作す、一として怪むものなきなり。生死の常の道、轉た相つぎて立つ、或は父は子を哭し、或は子は父を哭す、兄弟夫婦更相ひ哭泣す、顛倒上下して、無常の根本なり、皆當に過ぎ去るべし常に保つべからず、教語開導すれども之を信する者は少し。是を以て生死流轉して休止することあることなし。此の如きの人經法を信せず、心に遠き慮無くして、各意を快くせんと欲へり、愛欲に痴惑せ

られて道德をささらず、瞋怒に迷没して財色を貪狼す、之によりて道を得ず當に惡趣の苦にかへるべし。生死窮り已むことなし、哀なるかな甚だ傷むべし、或時は室家の父子兄弟夫婦、一は死し一は生れ、更相に哀愍す、恩愛思慕して憂念結縛す。

我、今汝に世間の事を語る。當につらく思ひ計りて衆惡を遠離すべし、其善き者を擇で勤めて之を行せよ、愛欲榮華は常に保つべからず、皆當に別離すべし、樂むべき者なし。それ至心ありて安樂國に生れんと願ふ者は、智慧明達し功德殊勝なることを得べし、心の所欲に隨ひ經戒を負ふて人の後にあること勿れ。

汝、今亦自ら生死老病の痛苦を厭ふべし、惡露不淨にして樂むべき者なし、宜く自ら決斷すべし、身を端し行を正して、益諸の善を作し、已を修め、体を潔し、心垢を洗除し、言行忠信にして表裏相應すべし。人能く自ら度して轉た相ひ拯濟し、精明に求願して善本を積累すれば(名號を稱念する)、一世の勤苦は臆須の間なりと雖

も、後には無量壽佛の國に生じて快樂極なし。長く道德と合明して、永く生死の根本を抜き、また貧患愚痴苦惱の患なし。

四

汝等、是に於て廣く徳本を植え（名號を稱念する）、心を正し意も正して、齋戒清淨なること一日一夜すれば、無量壽國にありて善を爲すこと百歳せんに勝れたり。所以は何、彼佛の國土は無爲自然にして、皆衆善を積みて毛髮の惡なければなり。此に於て善を修すること十日十夜すれば、他方の諸佛の國土に於て善をなすこと千歳せんに勝れたり。所以は何、他方の佛國は善を爲す者は多く惡をなす者は少く、福德自然にして造惡の地なければなり。唯此間のみ惡多くして自然なることあることなし、勤苦して求欲し、心勞れ形困しみ、苦を飲み毒を食ふ、未だ嘗て寧息せず、吾汝等天人の類を哀みて、苦心（んごう）に誨諭して教へて善を修せしめ、器に

隨ひ開導して經法を授與するに承用せざることなし。意の所願にありて皆道を得しむ。佛の遊履する所の國邑丘聚、化を蒙らざるはなし、天下和順し日月清明にして風雨時を以てし、災厲（さいれい）起らず國豊かに民安くして兵戈用ゐることなし、徳を崇め仁を興してつとめて禮讓を修む。（大無量壽經）

五

諸の衆生等聽け、日没の無常の偈を説かん。
人間忽々（とつ）として衆務を營む、年命の日夜に去れることを覺らず、燈の風の中に滅すること期し難きが如し。忙々たる六道定趣なし、未だ解脱して苦海を出づることを得ず、云何が安然として驚懼せざる、各聞け強健有力の時に、自策自勵して常住を求めよ。

此偈を説き已りて、更に當に心口に發願すべし。願くば弟子等、命終の時に臨

みて、心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、身心に諸の苦痛なく、身心快く樂く、禪定に入れるが如くにして、聖衆現前し、佛の本願に乗じて、阿彌陀佛國に上品往生せん、彼國に到り已りて、六神通を得て、十方界に入り苦の衆生を救攝せん、虚空法界盡きぬれば我が願も亦是の如くならん。

發願し已りて至心に阿彌陀佛に歸命す。(往生禮讚)

二、三部經鈔要

佛說無量壽經

一

我、聞たまへき是の如く。

一時、佛、王舍城耆闍崛山の中に住したまひき、大比丘衆、萬二千人と俱なり

その時、世尊、諸根悅豫し、姿色清淨にして光顔巍巍とまします。

尊者阿難、佛に白して言く。今日、世尊、諸根悅豫し姿色清淨にして、光顔巍巍とまします、明なる淨き鏡の影、表裏に暢るが如し。威容顯耀にして超絶したまへること無量なり、未だ曾て瞻觀せず、殊妙なること今の如くましますをば。

佛言はく、善哉、阿難問へる所甚だ快し。如來無蓋の大悲を以て三界を矜哀したまふ、世に出興したまふ所以は、道教を光闡して群萌を極ひ、惠むに眞實の利を以てせんと欲してなり。無量億劫にも値ひ難く見たてまつり難きこと、靈瑞華の時ありて時に乃し出づるが如し。今問へる所は饒益するところ多し。阿難諦に聽け、今汝が爲に説かん。對へて曰く唯然り願樂して聞きたまへんと欲ふ。

一一

佛阿難に告げたまはく、乃往過去久遠無量不可思議無央數劫に、錠光如來世に興出して、無量の衆生を教化し度脱して皆道を得せしめて、乃し滅度を取りたまひき。次に如來ましましき、名を光遠といふ、次をば月光と名づく、此の如きの諸佛皆悉く已に過ぎたまひき。

その時、次に佛ましましき、世自在王佛と名づけたてまつる。時に國王ましましき、佛の説法を聞きて心に悅豫をいただき、すなはち無上正直道の意を發し、國をすて王をすて、行じて沙門となり、號して法藏といふ、高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如來の所に詣で、佛足を稽首し、長跪合掌して佛に白して言さく、唯然し、世尊我無上正覺の心を發せり、願くは佛我が爲に廣く經法を宣べたまへ、我當に修行して佛國を攝取し、清淨に無量の妙土を莊嚴し、速に正覺を成じ、諸の生死勤求の本を抜かしめたまへ。

その時、世自在王佛其高明にして志願の深廣なるを知しめし、即ち法藏比丘の爲に而も經を説きて言はく、譬へば大海をも一人升量せんに、劫數を経歴せば尙底を窮めて、其妙寶を得べきが如し。人至心に精進して道を求めて止ざることあらば、かならず當に尅果すべし、何の願をか得ざらんと。いかに世自在王佛即ち爲に廣く二百十億の諸佛の刹土、天人の善惡、國土の龜妙を説きて、其心願に應じて悉く現じて此を與へたまふ。

時に、彼比丘、佛の説きたまふところの嚴淨の國土を聞きて、皆悉く親見して無上殊勝の願を起發せり、其心寂靜にして志著する所なく、一切の世間に能く及ぶ者なし、五劫を具足して佛國を莊嚴すべき清淨の行を思惟し攝取す。

比丘佛に白さく、やゝ聽察を垂れたまへ、我所願の如く當に具に之を説くべし。

一、設ひ我佛を得たらんに、國に地獄餓鬼畜生あらば正覺を取らし。(第一願)
二、設ひ我佛を得たらんに、國の中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずば、正覺を取らし。(第十一願)

三、設ひ我佛を得たらんに、光明能く限量ありて、下百千億那由他の諸佛の國を照さざるに至らば、正覺を取らし。(第十二願)

四、設ひ我佛を得たらんに、壽命能く限量ありて、下百千億那由他劫に至らば、正覺を取らし。(第十三願)

五、設ひ我佛を得たらんに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我名を稱せずん

ば、正覺を取らし。(第十七願)

六、設ひ我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して我國に生れんと欲ふて、乃至十念せん(十聲の念佛)。若し生れずば、正覺を取らし。唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。(第十八願)

七、設ひ我佛を得たらんに、十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修し、(萬行中の一行として念佛も存す)至心に發願して我國に生れんと欲はん、壽終る時に臨んで、假令大衆の與に圍繞せられて、其の人の前に現せずんば、正覺を取らし。(第十九願)

八、設ひ我佛を得たらんに、十方の衆生我名號を聞きて、念を我國に係て、諸の徳本を植え(専ら念佛の一行を修するこゝ)至心に回向して我國に生れんと欲はん、果遂せずんば、正覺を取らし。(第二十願)

九、設ひ我佛を得たらんに、他方佛土の諸の菩薩衆、我國に來生せば究竟して必ず一生補處に至らん。其の本願の、自在の所化、衆生の爲の故に、弘誓の鎧を被て、

徳本を積累し、一切を度脱し、諸佛の國に遊で菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめんをば除く。常倫を超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん、若し爾しからずば正覺を取らじ。
(第二十二願)

十、設ひ我佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界に、其れ女人ありて、我名字を聞きて、歡喜信樂し、菩提心を發して、女身を壓惡せん、壽終りて後また女像とならば、正覺をとらじ。(第三十五願)

佛阿難に告げたまはく、爾時法藏比丘此の願を説き已りて頌を説きて曰く。

我超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、斯の願満足せずんば、誓て正覺を成せじ。

一、我無量劫に於て、大施主と爲りて、普く諸の貧窮すくを濟はずんば、正覺を成せじ。
二、我佛道を成するに至らば、名聲十方に超えん、究竟して聞ゆる所なくば、誓て

正覺を成せし。

三、斯の願若し尅果すべくんば、大千應に感動すべし、虚空の諸の天人、當に珍妙の華を雨ふらすべし。

三

佛阿難に告げたまはく、法藏菩薩今已に成佛して現に西方に在します、此を去ること十萬億刹なり、其の佛の世界を名けて安樂といふ、其て國土には、自然の七寶、金銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、硨磲、瑪瑙合成して地を爲せり。恢廓曠蕩くわいくわくとして限極すべからず、光赫焜耀こんやうにして微妙奇麗なり、清淨の莊嚴、十方一切の世界に超躡しやうせり。

佛阿難に告げたまはく、無量壽佛の威神光明は最尊第一にして、諸佛の光明の及ぶこと能はざる所なり。是故に無量壽佛をば、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、

無對光佛、燄王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號す。

それ衆生ありて、斯光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟にして歎喜踊躍し善心生ず。若し三塗勤苦の處に在りて、此光明を見たてまつれば、皆休息することを得て、また苦惱なく、壽終りての後皆解脫を蒙る。

無量壽佛の光明顯赫にして、十方諸佛の國土を照耀したまふに聞えざることなし。但我今其の光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆も咸く共に嘆譽したまふこと、またく是の如し。若し衆生ありて其光明の威神功徳を聞きて、日夜に稱説し、至心にして斷えざれば、意の所願に隨ひて其國に生るゝことを得て、諸の菩薩聲聞大衆の爲に、共に嘆譽して其功徳を稱せられん。其然る後、佛道を得ん時に至りて、普く十方の諸佛菩薩の爲に其光明を歎せられんこと亦今の如くならん、佛言はく、我無量壽佛の光明威神巍々殊妙なるを説かんに、晝夜一切すとも尙未だ盡すこと能はじ。

彼の佛の國土は清淨安穩にして、微妙快樂なり無爲泥洹の道に次し、其諸の聲聞菩薩天人智慧高明にして神通洞達せり、咸く同く一類にして形異狀なし、但し餘方に因順するが故に天人の名あり、顔貌端正にして世に超えて希有なり、容色微妙にして天にあらず人にあらず皆自然虛無の身、無極の體を受けたり。

四

佛阿難に告げたまはく、それ衆生ありて彼國に生るゝ者は、皆悉く正定の聚に住す、所以は何、彼佛國の中には諸の邪聚及び不定聚なければなり。十方恒沙の諸佛如來、皆共に無量壽佛の威神功徳の不可思議なることを讚歎したまふ。諸有衆生、其名號を聞きて、(名號のいはれを聞く名號を稱ふるとの二義を含む)、信心歡喜し乃至一念せん、(善導法然兩祖は一聲の念佛とし親鸞聖人は念佛を信する一心とす)至心に回向した

まへり、彼國に生せんと願すれば、即ち往生を得て不退轉に住す。唯五逆と正法を誹謗せんをば除ぐ。

佛阿難に告げたまはく、十方世界の諸天人民、それ至心ありて彼國に生せんと願するに、凡そ三輩あり、其上輩とは家を棄て欲を捨て、沙門となり、菩提心を發して、一向に専ら無量壽佛を念じ、(佛の名南無阿彌陀佛を稱ふること) 諸の功德を修し彼國に生せんと願す、此等の衆生壽終る時に臨みて、無量壽佛諸の大衆と與に其人の前に現じたまふ、即ち彼佛に隨ひて其國に往生し、便ち七寶華の中に於て自然に化生し不退轉に住せん。智慧勇猛にして神通自在なり、是故に阿難それ衆生あり、今世に於て無量壽佛を見たてまつらんと欲はば、應に無上菩提の心を起し、功德を修行して彼國に生せんと願すべし。

其中輩とは十方世界の諸天人民、それ至心ありて彼國に生せんと願するに、行じて沙門となり、大に功德を修すること能はずと雖も、當に無上菩提の心を發し

て、一向に専ら無量壽佛を念じ、(南無阿彌陀佛を稱ふること) 多少に善を修し、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門を飯食せしめ、繒そうを懸け、燈とうを燃し、華を散じ、香を燒きて、此を以て回向して彼國に生せんと願すれば、其人終に臨みて無量壽佛其身を化現したまふ、光明相好具つばさに眞佛の如くにして、諸の大衆とともに其人の前に現じたまふ、即ち化佛に隨ひて其國に往生し不退轉に住せん、功德智慧次で上輩の者の如くならん。

其下輩とは十方世界の諸天人民、それ至心ありて彼國に生れんと欲はんに、たとひ諸の功德をなすこと能はざれども、當に無上菩提の心を發して、一向に意を專にして、乃至十念無量壽佛を念じて、(南無阿彌陀佛を稱ふること) 其國に生れんと願すべし、若し深法を聞きて歡喜信樂して疑惑を生せず、乃至一念彼佛を念じて、至誠心を以て其國に生せんと願すれば、此人終に望みて夢のごとく彼佛を見たてまつりて、また往生を得、功德智慧次で中輩の者の如くならん。

佛阿難に告げたまはく、彼國の菩薩は皆當に一生補處を究竟すべし、其本願ありて衆生の爲の故に、弘誓の功德を以て自ら莊嚴し、普く一切衆生を度脱せんご欲はんをば除く。阿難彼の諸の菩薩は是の如き無量の功德を成就せり、我但汝の爲に略して之れを説くのみ、若し廣く説かば百千萬劫にも窮盡すること能はじ。

佛、彌勒菩薩天人等に告げたまはく、無量壽國の聲聞菩薩の功德智慧稱說すべからず、又其國土は微妙安樂にして清淨なること此の如し、何ぞ力めて善を爲して道の自然なるを念ひて、宜く各勤精進して努力て自ら之を求むべし。必ず超絶し去りて安養國に往生することを得て、横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉ぢ、道に昇ること窮極なからん。往き易くして人なし、何ぞ世事を棄て、勤行して道徳を求めざらん、極長生をうべし、壽樂極あることなけん。

五

佛阿難に告げたまはく、汝起ちて更に衣服を整へ、合掌し恭敬して無量佛壽を禮したてまつるべし。ここに阿難起ちて、衣服を整へ身を正くし、面を西にして恭敬し合掌して五體を地に投げ無量壽佛を禮したてまつりて、白して言さく、世尊願はくば、彼佛の安樂國土及び諸の菩薩聲聞大衆を見たてまつらん。即時に無量佛大光明を放ちて、普く一切諸佛の世界を照したまふ、譬へば劫水の世界に彌滿せるに、其中の萬物沈没して現せず、混濇浩汗として、唯大水を見るが如し、彼佛の光明もまたく是の如し。聲聞菩薩の一切の光明皆悉く隱蔽して、唯佛の光の明曜顯赫なるを見たてまつる。

その時佛阿難及び慈氏菩薩に告げたまはく、彼國の人民胎生の者あり汝また見るや否や、其胎生の者の處する所の宮殿、或は百由旬或は五百由旬なり、各其中に於て諸の快樂を受くること切利天上の如くにして、亦皆自無なり。その時慈氏菩薩佛に白して言さく、世尊何の因何の緣ありてか彼國の人民胎生化生なるや。

佛慈氏に告げたまはく、若し衆生ありて疑惑の心を以て諸の功德を修し、彼國に生せんと願せん、佛智不思議智、不可稱智、大乘廣知、無等無倫、最上勝智を了らす、此の諸智に於て疑惑して信せず、然るに猶ほ罪福を信じ善本を修習して其國に生せんと願せん、此諸の衆生、彼宮殿に生れて壽五百歳、常に佛を見たてまつらず、經法を聞かず、菩薩聲聞を見ず、是故に彼國土に於て之を胎生を謂ふ、若し衆生ありて明に佛智乃至勝智を信じて諸の功德を作して信心回向せん、此諸の衆生七寶華の中に自然に化生し跏趺して坐せん、須臾の頃わひたに身相光明智慧功德諸の菩薩の如く具足し成就せん。

當に知べし彼の化生の者は智慧勝れたるが故に、其胎生の者は皆智慧なし、若し此衆生其本の罪を識りて、深く自ら悔責けしやくして彼處を離れんことを求むれば、即ち意の如くなるを得て、無量壽佛の所に往詣して恭敬し供養し、亦徧く無量無數の諸餘の佛の所に至ることを得て、諸の功德を修せん。彌勒當に知るべし、それ

菩薩ありて疑惑を生ずる者は大利を失すとなす、是故に應に明かに諸佛の無上の智慧を信すべし。

六

佛彌勒に語りたまはく、それ彼佛の名號を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念することあらん(一聲の念佛)、當に知るべし、此人は大利を得となす、則ちは無上の功德を具足するなり。是故に彌勒、たとひ大火ありて三千大千世界に充滿するとも、かならず當に此を過ぎて此經法を聞きて、歡喜信樂し受持し讀誦して、説の如く修行すべし。吾今諸の衆生の爲に此經法を説きて、無量壽佛及び其國土の一切の所有を見せしむ。我が滅度の後を以て、また疑惑を生ずることを得ることなかれ。當來の世に經道滅盡せんに、我慈悲哀愍を以て、特に此經を留めて止往すること百歳ならん、それ衆生ありて斯の經に値ふ者は、意を所願に隨ひて皆

得度すべし。

如來の興世値ひ難く、見たてまつり難し、諸佛の經道得難く、聞き難し、善智識に遇ひ法を開きて能く行すること、これ亦難しとなす。若し斯經このを開きて信樂受持することは、難の中の難にして、此難に過ぎたるはなし。是故に我法是の如し、是の如く説き、是の如く教ふ。當に信順して法の如く修行すべし。

その時世尊此經を説きたまふに、無量の衆生無上正覺の心を發しき。

佛說觀無量壽經

是の如く我聞きたまへき。

一時、佛、王舍城耆闍崛山の中に在して大比丘衆千二百五十人と俱なりき。その時王舍大城に一の太子あり阿闍世と名づく、惡友の教に隨順して、父の王頻婆娑羅を幽閉して七重の室の内におき、諸の群臣を制して一人も往くことを得しめず。國の大夫人を韋提希と名く、大王を恭敬し、澡浴清淨にして酥密を以て其身に塗り、諸の瓔珞の中に蒲桃の漿をいれて、密に以て王にすゝむ。時に阿闍世其母を怒りて即ち利劍をとりて其母を害せんと欲す。時に耆婆大臣白して言さく、大王慎みて母を害すること勿れ、王此語を聞きて、内官に勅語し深宮に閉置して出さしめず。

時に韋提希幽閉せられ已りて愁憂憔悴す、遙に耆闍崛山に向ひて佛の爲に禮を作して、我今愁憂す、世尊は威重にして見たてまつることを得るに由なし。願はくば目連と尊者何難とを遣はして、我が爲めに相見せしめたまへ。是の語を作し已りて悲泣雨涙して遙に佛に向ひて禮したまつる。その時世尊韋提希の心の所念を知しめして、耆闍崛山より没して王宮に出でたまふ、目連は左に侍り阿難は右に在り。

時に韋提希佛世尊を見たてまつりて、自ら瓔珞を絶ち身を擧げて地に投げ、號泣して佛に向ひて白して言さく。世尊我宿何の罪ありと此惡子を生める。世尊また何等の因縁ありてか提婆達多と共に眷屬たるや。唯願はくば世尊、我が爲に廣く憂惱無き處を説きたまへ。我當に往生すべし、閻浮提の濁惡世をば樂はざるなり、此濁惡の所には地獄餓鬼畜生充滿して不善のともがら多し、願はくば、我未來に惡聲を聞じ惡人を見じ、今世尊に向ひて五軀を地に投げて、求哀し懺悔す。

唯願はくば、佛日我に清淨の業處を觀ることを教へたまへ。

その時世尊眉間の光を放ちたまふに、其光金色にして徧く十方無量の世界を照し、無量の諸佛の國土あり、嚴顯にして觀つべし、韋提希をして見せしめたまふ。

時に韋提希、佛に白して言さく。世尊是の諸の佛土また清淨にして皆光明ありと雖、我今極樂世界の阿彌陀佛の所に生れんと樂ふ。唯願はくば、世尊我に思惟を教へたまへ、我に正受を教へたまへ。

その時世尊韋提希に告げたまはく。汝今知れりや否や、阿彌陀佛此を去りたまふこと遠からず。彼國に生れんと欲はん者は、當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三歸を受持し、衆戒を具足し、威儀を犯さず。三には菩提心を發し深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如きの三事を名けて淨業とす。汝今知れりやいなや、此三種の業は過去未來現在の三世の諸佛の淨業の正因なり。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく、未來世の一切衆生に西方極樂世界を觀することを教へん。佛力を以ての故に、當に彼の清淨の國土を見ることを得ること明鏡を執りて自ら面像を見るが如くなるべし。

是を語を説たまふ時、無量壽佛空中に住立したまふ。觀世音大勢至是の二大士左右に侍立せり、光明熾盛なり、具に見るべからず。百千の閻浮檀金の色も比と爲すことを得ず。時に韋提希無量壽佛を見たてまつり已りて、接足し作禮して佛に白して言さく。世尊我今佛力に因るが故に無量壽佛及び二菩薩を見たてまつることを得たり。未來の衆生當に云何してか無量壽佛及び二菩薩を觀たてまつるべや。

佛、阿難及び韋提希に告げたまはく。彼佛を觀んと欲はゞ先當に像を想ふべし、

無量壽佛の身想光明を觀すべし。無量壽佛の身は百千萬億の夜摩天の閻浮檀金の色の如し、佛身の高さ六十萬億那由他恒河沙由旬なり。眉間の白毫は右にめぐりて、婉轉して五須彌山の如し。佛眼は四大海水の如く青白分明なり。身の諸の毛孔より光明を演出すること須彌山の如し。彼佛の圓光は百億の三千大千世界の如し、圓光の中に於て百萬億那由他恒河沙の化佛まします。一一の化佛に亦衆多無數の化菩薩ありて以て侍者たり。無量壽佛は八萬四千の相あり、一一の相に各八萬四千の隨形好あり、一一の好にまた八萬四千の光明あり。一一の光明徧く十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。其光明相好及び化佛具に説くべからず。但當に憶想して心眼をして見せしむべし、是の觀を作すをば一切の佛身を觀すと名く、佛身を觀するを以ての故に、また佛心を見たてまつる、佛心とは大慈悲是なり、無縁の慈を以て諸の衆生を攝したまふ。此觀を作す者は、身を捨て、他世に諸佛の前に生じて無生忍を得、是故に智者當に心をかけてあきらか

に無量壽佛を觀すべし。

佛、阿難及韋提希に告たまはく。若し至心ありて西方に生せんと欲せん者は、先當に一の丈六の像の池水の上に在すを觀すべし。先の所説の如きの無量壽佛は、身量無邊にして是凡夫の心力の及ぶ所にあらず。然るに彼如來の宿願力の故に、憶想することあれば心ず成就することを得べし。但佛像を想ふすら無量の福を得、何に況や佛の具是せる身想を觀せんをや。阿彌陀佛は神通如意にして、十方の國に於て變現したまふこと自在なり、或は大身を現じて虚空の中に滿ち、或は小身を現じて丈六八尺なり、現する所の形皆眞金色なり。

三

佛、阿難及韋提希に告げたまはく。上品上生の者とは、若し衆生ありて彼國に生せんと願すれば、三種の心を發して即便ち往生す。何等をか三とする、一には至

誠心、二には深心、三には過向發願心なり。三心を具すれば必ず彼國に生ず。また三種の衆生ありて當に往生を得べし。一には慈心にして殺さず諸の戒行を具す、二には大乘方等經典を讀誦す、三には六念を修行す廻向發願して彼國に生せんと願す、此功德を具して一日乃至七日すれば即ち往生を得。彼國に生ずる時、此人精進勇猛なるが故に阿彌陀如來、觀世音大勢至、無數の化佛、百千の比丘、聲聞大衆、無數の諸天、七寶の宮殿と與なり。觀世音菩薩は金剛臺を取り大勢至菩薩と與に行者の前に至る、阿彌陀佛は大光明を放ちて行者の身を照し、諸の菩薩と與に手を授けて迎接したまふ。觀世音大勢至無數の菩薩と與に行者を讚歎して其心を勸進す、行者見已りて觀喜踊躍し、自ら其身を見れば金剛臺に乗じて佛後に隨從す、彈指のあひだの如きに彼國に往生す。彼國に生じ已りて佛の色身の衆相具足せるを見たてまつり、諸の菩薩の色相具足せるを見る、光明の寶林妙法を演説す、聞き已りて即ち無生法忍を悟る、須臾の間を経て諸佛に歷事して十方界に

徧し、諸佛の前に於て次第に授記せられ、本國に還到して無量百千の陀羅尼門を得、是を上品上生者と名く。

下品下生の者とは、或は衆生ありて、不善の業たる五逆十惡を作りて、諸の不善を具す。此如き愚人、惡業を以ての故にまさに惡道に墮すべし、多劫を經歷して苦を受ること窮りなからん。命終る時に臨みて、善知識の種々に安慰して爲に妙法を説き、教へて佛を念せしむるに遇はん。此人苦に逼られて佛を念するに違あらず、善友告げて言く、汝若し念すること能はずんば、まさに無量壽佛と稱すべし、是の如く至心に聲をして絶ざらしめて、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱せしむ、佛名を稱するが故に念々の中に於て八十億劫の生死の罪を除く。命終る時金蓮華を見る、猶し日輪の如くにして其人の前に住す、一念の頃の如きに即ち極樂世界に往生することを得ん。蓮華の中に於て十二大劫を滿て、蓮華方に聞く、觀世音大勢至大悲の音聲を以て、それが爲に廣く諸法實相除滅罪の法を説く、聞き

已りて歡喜し、時に應じて即ち菩提の心を發す、是を下品下生の者と名く。

四

佛、阿難に告げたまはく。此經をば觀極樂國土無量壽佛觀世音菩薩大勢至菩薩と名く。また淨除業障生諸佛前と名く。汝當に受持すべし忘失せしむることなかれ、此の三昧を行せん者は現身に無量壽佛及び二大士を見たてまつることを得。若し善男子善女人、但佛の名二菩薩の名を聞くすら無量劫の生死の罪を除く、何に況や憶念せんをや。若し念佛する者は、當に知るべし此人は是れ、人中の分陀利華なり、觀世音菩薩大勢至菩薩其勝友となる。

佛、阿難に告げたまはく。汝好く是の語を持て、是の語を持てといふは、即ちは無量壽佛の名を持てとなり。(念佛の一行を信じ稱ふるなり)佛此語を説きたまふ時、尊者目犍連阿難及び韋提希等、佛の所説を聞きて皆大に歡喜す。

佛說阿彌陀經

一

是の如く我聞きたまへき。

一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に在して、長老舍利弗ぼつに告げたまはく。是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名づけて極樂と曰ふ。其土に佛まします阿彌陀と號す、今現にましまして法を説きたまふ。

舍利弗、彼土を何が故に名づけて極樂となす、其國の衆生諸の苦あることなく、但諸の樂を受くるが故に極樂と名く。

二

舍利弗、汝が意に於ていかん、彼佛を何が故に阿彌陀と號する。舍利弗彼佛の

光明無量にして十方の國を照すに、障礙する所なし、是の故に號して阿彌陀となす。又舍利弗彼佛の壽命及び其人民も無量無邊阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名く。又舍利弗、極樂國土には衆生生るゝ者は皆これ阿鞞跋致あびんぱちなり、其中に多く一生補處あり、其數甚だ多し、これ算數の能く之を知る所にあらず。舍利弗聞かん者當に願を發して彼國に生れんて願すべし、是の如き諸の上善人と俱に一處に會することを得ればなり。

三

舍利弗、少善根福德の因縁を以ては彼國に生るゝことを得べからず。(念佛は大善

大功徳自余の萬行は小善小功徳)

舍利弗、若し善男子善女人ありて阿彌陀佛を説くを聞きて、名號を執持すること、(念佛の一行を信じ稱ふるなり)若は一日若は二日若は七日、一心にして亂れざれば

其人命終の時に臨みて、阿彌陀佛諸の聖衆とともに現じて其前に在さん、此人に終らん時心顛倒せずして、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得ん。

舍利弗、我是の利を見るが故に此言を説く。若し衆生ありて是の説を聞かん者は、當に願を發して彼國土に生ずべし。

四

舍利弗、我今阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎するが如く、東方にまた阿佛閼^{しくび}妙音佛、南方の世界に日月燈佛等、西方の世界に無量壽佛淨光佛等、北方の世界に焰肩佛等、下方の世界に師子佛等、上方の世界に梵音佛等、是の如き等の恒河沙數の諸佛ましまして、各其國に於て廣長の舌相を出して、徧く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝等衆生當に是の不可思議功德を稱讚する、一切諸佛に護念せらるる經を信ずべし。

我、五濁惡世に於て此難事を行じて、あのくたら三みやく三菩提を得て、一功世間の爲に此難信の法を説く、是を甚だ難しとなす。

佛、此經を説きたまふこと已りて、舍利弗及び諸の比丘、佛の所説を聞きたてまつりて觀喜し信受して禮を作して去りにき。

三、七祖聖教鈔要

龍樹菩薩曰く

- 一。佛法に無量の門あり、世間の道に難あり易あり、陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し。菩薩の道も亦是の如し、或は勤行精進のものあり、或は信方便の易行を以て、疾く阿惟越致地に至る者あり。乃若し人疾く不退轉地に至らんと欲はぐまさに恭敬心を以て、執持して名號を稱すべし。
- 一。人能くこの佛の無量力功德を念すれば、即時に必定に入る、是故に我常に念じたてまつる。乃若し人、善根を植えて疑へば、則ち華ひからず。信心清淨なれば、華ひらきて則ち佛を見たてまつる。
- 一。在家の菩薩は、應に諸の三想を生ずべし、妻は是れ無常なりとの想、失の想、

- 壞の想なり。又三想あり、是れ戲笑の伴にして後世の伴に非ず、是れ共に食ふ伴にして業の果報を受くる伴にあらず、是れ樂む時の伴にして苦む時の伴にあらず。又三想あり、是れ不淨の想、臭穢の想、可厭の想なり。
- 一、在家の菩薩、若し子に於て愛偏に多きを知りなば、即ち智力を以て思惟して捨離せよ、知力とは應に是の如く念すべし、菩薩の平等の心には、すなはち阿耨阿耨多羅三藐三菩提三藐三菩提あり、高下の心には則ち菩提なしと。(十住毗婆沙論)
 - 一、念佛三昧は能く、種々の煩惱及び先世の罪を除く。乃念佛三昧には、大福德ありて能く衆生を度す。乃一心に念佛して、信淨くして疑はざれば、必ず佛を見ることを得て、終に虚からざるなり。
 - 一、佛に問ふ。何なる業の因縁の故に彼の國に生ずることを得るやと。佛即ち答へて言はく、善男子常に念佛三昧を修して、憶念廢せざるを以ての故に我國に生ずることを得べし。

一。また次に常に念佛すれば、種々の功德利を得、譬へば大臣特に恩寵を蒙り、常に其主を念ふが如し。菩薩もまた是の如し、種々の功德無量の智慧皆佛より得たるを知る、恩の重きを知るが故に常に念佛す。(智度論)

天親菩薩のたまはく

一。世尊我一心に盡十方無礙光如來に歸命したてまつり、安樂國に生せんと願す。
一。いかんが觀じ、いかんが信心を生ずる。もし善男子善女人五念門を修して、行成就しぬれば、畢竟じて安樂國土に生じて彼阿彌陀佛を見たてまつることを得。何等か五念門なる、一には禮拜門、二には讚歎門、三には作願門、四には觀察門五には廻向門なり。いかんが禮拜する、身業に阿彌陀如來應正遍知を禮拜す。いかんが讚歎する、口業に讚歎す、彼の如來の名みなを稱し、彼の如來の光明智相の如く、彼の名義の如く、實の如く、修行し相應せんと欲するが故に。いかんが作願

する心に常に作願す、一心に専ら畢竟じて安樂國土に往生せんと念じて實の如く奢しゃ摩ま他たを修行せんと欲するが故に。いかんが觀察する、智慧を以て觀察す、一には彼佛の國土の莊嚴功德、二には阿彌陀佛の莊嚴功德、三には彼の諸の菩薩の功德莊嚴を觀察す。いかんが廻向する、一切苦惱の衆生を捨てずして、心に常に作願す、廻向を首と爲して、大悲心を成就することを得るが故に。(淨土論)

曇鸞大師のたまはく

一。衆生ありて不善の業たる五逆十惡を作り諸の不善を具す、命終の時に臨みて苦にせまられて、佛を念するにいとまあらず、善友告げていはく、汝もし念する能はずば、まさに無量壽佛と稱すべしと、かくの如く至心に聲をして絶えざらしめて、十念を具足し南無無量壽佛と稱す。佛の名を稱するが故に、念々の中に於て八十億劫の生死の罪を除く、一念のあひだに即ち極樂世界に往生することを得

ん、是を下品下生の者と名くと、此の經を以て證するに、明に知る下品の凡夫たゞ正法を誹謗せず、佛を信するの因縁と以て皆往生を得しむ。

一。かの如來の名を稱し、かの如來の光明智相のごとく、かの名義のごとく、實のごとく修行し相應せんと欲ふがゆへに。稱_二彼如來名_一といふは、いはく無礙光如來のみなを稱するなり。如_二彼如來光明智相_一といふは、佛の光明はこれ智慧の相なり、この光明十方世界をてらすに障礙あることなし、よく十方衆生の無明の闇をのぞく、日月珠光のたゞ室元のうちの闇を破するが如きにはあらざるなり。如_二彼名義_一、欲_二如_レ實修行相應_一といふは、かの無礙光如來の名號は、よく衆生一切の無明を破し、よく衆生一切の志願をみてたまふ、しかるに稱名憶念すれども、無明なほありて、所願を満たさざる者あり、何となれば、實の如く修行せず、名義と相應せざるによるが故なり。いかんが不_二如_レ實修行_一と、名義と相應せざるとする、いはく如來はこれ實相の身なり、これ物の爲の身なりとしらず、また三種

の不相應あり、一には信心淳_{あつ}からず、存せるが如く、亡せるが如きの故に。二には信心一ならず、決定なきがゆへに。三には信心相續せず、餘念へだつるがゆへに。この三句展轉してあひ成す、信心淳_{あつ}からざるがゆへに、決定なし。決定なきがゆへに、念相續せず。また念相續せざるがゆへに、決定の信をえず。決定の信をえざるがゆへに、心あつからざるべし。これと相違するを如實修行相應と名づく。このゆへに論主はじめに我一心とのたまへり。

一。譬へば淨摩尼珠の如し、之を濁水におけば即ち清淨となる、もし人無量生死の罪濁ありと雖も、彼の阿彌陀如來の至極無生清淨寶珠の名號をききて、之を濁心に投ずれば、念々の中に罪滅して、心淨_{きよ}く即ち往生することをう。

一。いかんが廻向し給へる、一功苦惱の有情を捨てずして心常に作願すらく、廻向を首として大悲心成就することを得給へるが故にとのたまへり。廻向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。往相とは已が功德を以て、一切衆生に廻

施したまひて、作願して共に彼阿彌陀如來の安樂淨土に往生せしめ給ふなり。還相とは彼土に生じ已て、生死の稠林ちゆうりんに廻入して、一切衆生を教化して、共に佛道に向はしめ給ふなり。若は往若は還、皆衆生を抜いて生死の海を渡らせんが爲にし給へり。

一。言ふ所の不虛作住持とは、もと法藏菩薩の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力とに依る。願以て力を成ず、力以て願に就く、願徒然ならず、力虛設ならず、力願あひ符かなふて、畢竟して差たがはず、故に成就といふ。(論註)

道綽禪師のたまはく

一。若し教、時機に赴けば修し易く悟り易し、若し機と教と時に乖ちがひば修し難く入り難し。是故に大集月藏經に云く。佛滅度の後、第一の五百年には我が諸の弟子、慧を學ぶこと堅固なるを得ん。第二の五百年には定を學ぶこと堅固なるを得

ん。第三の五百年には多聞讀誦を學ぶこと堅固なるを得ん。第四の五百年には塔寺を造立し、福を修し、懺悔すること堅固なるを得ん。第五の五百年には自法隱滯して、多く諍訟あらん、微すこく善法ありて堅固なるを得ん。

今の時の衆生を計るに、即ち佛、世を去りて後の第四の五百年に當れり。正しく是れ懺悔し福を修し、應に佛の名號を稱すべき時の者なり。若し一念阿彌陀佛を稱するに即ち能く八十億劫の生死の罪を除劫せん、一念既に爾しかなり況や常念を修するをや。即ち是れ恒に懺悔する人なり。又若し聖を去ること近ければ、即ち前者の定を修し慧を修するは是れ其正學なり、後者は是れ兼あなり、もし聖を去ること己に遠ければ、則ち後者の名なを稱ふるは是れ正なり、前者は是れ兼あなり。

一。大集月藏經に云はく、我未法の時の中、億々の衆生行を起し道を修むるに未だ一人の得る者あらずと。當今に未法にして、現に是れ五濁惡世なり。唯淨土の一門ありて通入すべき路なり。乃若し起惡造罪を論すれば、何ぞ暴風駛雨に異な

らんや。是を以て諸佛の大悲すゝめて淨土に歸せしむ。たとへ一形に惡を造れども、たゞよく意をかけて、專精に常によく念佛すれば、一切の諸障自然に消除し、定めて往生することを得。(安樂集)

善導大師のたまはく、

一、西方寂靜無爲の樂みよこには、畢竟逍遙として有無を離れたり。大悲心に薰じて法界に遊ぶ。身を分ちて物を利すること、等しくして殊ることなし。或は神通を現じて而して法を説き。或は相好を現じて無餘に入る。變現の莊嚴意にしたがひて出づ。群生見るもの罪みな除こる。又讚じて云はく、歸去來魔郷いざいなんには停まるべからず。曠劫よりこのかた六道に流轉して、ことごとくみなへたり、到る處餘の樂なし。唯愁歎の聲を聞く、此生平を畢へて後、彼の涅槃の城みやこに入らん。(定善義)

一、仰ぎ願くば一切の行者等、一心に唯佛語を信じて身命を顧みず、決定して行

によりて、佛の捨てしめたまふ者は、即ち捨て、佛の行せしめたまふ者は即ち行じ、佛の去かしめたまふ處は即ちゆく。是を佛教に隨順し、佛意に隨順すと名く。是を佛願に隨順すと名く。是を眞の佛弟子と名く。(散善義)

一、彌陀の名願何れの時にか聞かむ。佛の慈恩を荷ひて實に報じ難し。佛の願力に乗じて西方を往く。娑婆永く別ること更に何ぞ憂へん。心々念佛して疑ひを生ずるなかれ。六方の如來虚りならざるを證したまふ。(法事讚)

源信和尚のたまはく

一、今此の娑婆世界は耽玩たんぐわんすべきことなし。輪王の位も七寶久しからず、天上の樂も五衰早く來る、乃至有頂も輪廻期なし、況んや餘の世人をや、事と願と違ひ、樂と苦とともなり。富める者未だ必ずしも命ながからず、命永きもの必ずしも富まず、或は昨日は富みて今は貧となり、或は朝に生れて暮には死しぬ。故に經に

は出息入息を待たず、入息は出息を待たずと。唯眼前に樂み去りて哀み來るのみならず、亦命終に臨みて、罪に隨ひて苦しみにおつ。彼の西方世界は、樂をうるること窮りなく、人天近接して兩ながら相見ることを得、慈悲心に薰じて互に一子の如し。共に瑠璃地の上に經行し、同じく梅檀林の間に遊戯す。宮殿に至り、林地より林地に至る若し寂かならんことを欲する時は、風浪絃管自ら耳の下に隔たり。もし見んと欲する時は、山川溪谷なほ眼前に現はる。

一、一々の光明、遍く十方の世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。我も亦かの攝取の中に在れども、煩惱眼を障へて見ることあたわずと雖も、大悲ものう倦きことなくして、常に我身を照したまふ。(往生要集)

一、先三惡道をはなれて、人間に生るることおほきなる喜なり。身はいやしくとも畜生におとらんや。家はまづしくとも餓鬼にまさるへし。心に思ふことかなはずとも地獄の苦にくらぶべからず。世の住みうきは厭ふたよりなり。此故に人間

に生れたることを喜ぶべし。

信心あさけれども本願ふかき故に、たのめば必ず往生す、念佛ものうけれども稱ふれば定て來迎にあづかる功德莫大なる故に、本願にあふことを喜ぶべし。

又云、妄念はもとより凡夫の地体なり、妄念のほか別に心はなきなり。臨終の時までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞと心得て念佛すれば、來迎にあづかりて蓮臺に乗する時こそ、妄念をひるがへしてさとり的心とはなれ。妄念のうちより申し出したる念佛は、にごりにしまぬ蓮はらすの如くにて決定往生疑ひあるべからず。(横川法語)

法然上人のたまはく

一。若し無漏の智劍なくば、争か惡業煩惱の絆きづなを斷んや。惡業煩惱の絆を斷ずば、何ぞ生死けばくの身を解説する事を得んや。悲き哉く。如何せんく。ここに

我が如きは、既に戒定慧の三學の器に非ず。此の三學の外に我心に相應する法門ありや。我身に堪へたる修行や有ると、よろづの智者に求め、もろくの學者にとぶらひしに、教ふる人もなく。示すやからもなし。然る間、なげきく経藏に入り、かなしみく聖教に向ひて、手づから自ら披きて見しに、善導和尚の觀經の疏に云く。一心專念彌陀名號、行住坐臥、不問時節久近、念々不捨捨者、是名正定之業、順彼佛願故、と云ふ文を見得て後、我等が如きの無智の身は、偏へに此の文を仰ぎ、専ら此の理をたのみて、念々不捨の稱名を修して、決定往定の業因に備ふべし、只善導の遺教を信するのみに非ず、又厚く彌陀の弘誓に順せり。順彼佛願故の文、深く神に染み、心に留たる也。

一。又念佛の數を多く申す者を、自力を上げむと云ふ事、是又物を覺へず淺猿さひが事なり。只一念二念を唱ふとも、自力の心ならん人は、自力の念佛とすべし。千遍萬遍を唱ふとも、百日千日、夜晝はげみ積ごも、偏に願力を憑み他力を仰ぎ

たらん人は、自力の念佛とすべし。千遍萬遍を唱ふとも、百日千日、夜晝はげみ積ごも、偏に願力を憑み他力を仰ぎたらん人の念佛は、聲々念々併ら他力の念佛にてあるべし。されば三心を發したる人の念佛は、日々夜々時々尅々に唱ふれども、しかしながら願力をたのみたる心にて唱へたれば、かけてもふれても、自力の念佛とは云ふべからず。

一。心のそみくこと、身の毛もいよだち、涙も落ちるをのみ、信の發ると申すはひが事にてあるなり。其は歡喜隨喜悲喜とぞ申すべき。信と云ふは疑に對する心にて疑を除くを信とは申すべきなり。見る事に付ても、聞く事に付ても、其の事一定、さぞと思ひとりつる事は、人いかに申せども、不定に思ひなす事はなきぞかし。是をこそ物を信することは申せ。其の信の上に歡喜隨喜なんども發らんに、勝れたるにてこそあるべけれ。(和灯)

四、相承

法然上人

選擇本願念佛集

南無阿彌陀佛

往生之業、
念佛爲本

一

善導和尚正雜二行を立て、雜行を捨て、正行に歸するの文。

觀經の疏の第四に云く、行に就きて信を立つとは、然るに行に二種あり、一には正行二には雜行なり。正行と言ふは専ら往生經の行に依りて行するは是を正行と名く、何者が是なるや、一心に専ら此觀經彌陀經無量壽經等を讀誦し、一心に

專注して彼國の二報莊嚴を思想し觀察し憶念し、若し禮すれば即ち一心に専ら彼佛を禮し、若し口に稱すれば即ち一心に専ら彼佛を稱し、若し讚歎供養すれば即ち一心に専ら讚歎し供養す、是を名けて正となす。又此正の中に就きてまた二種あり、一には一心に専ら彌陀の名號を念じて行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てざるは是を正定の業と名く、彼佛の願に順するが故に。若し禮誦等に依らば即ち名けて助業となす。此正助二行を除きて已外の自餘の諸善をば悉く雜行と名く。若し前の正助二行を修すれば心常に親近して憶念斷えず名けて無間となすなり、若し後の雜行を行すれば即ち心常に間斷す、廻向して生ずることを得べしと雖すべて疎雜の行と名くるなり。

何が故ぞ五種の中に獨り稱名念佛を以て正定の業と爲すや、答て曰く彼佛の願に順するが故に、意にいはいはく稱名念佛は是れ彼佛の本願の行なり、故に之を修する者は彼佛願に乗じて必ず往生を得るなり、その本願の義は下にいたりて知るべ

し。

二

彌陀如來餘行を以て往生の本願と爲したまはず、たゞ念佛を以て往生の本願と爲したまへるの文。

無量壽經の上に云く、設ひ我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して我國に生せんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじと。

觀念法門に上の文を引きて云く、若し我成佛せんに、十方の衆生、我國に生せんと願じて、我名字を稱すること下十聲に至るまで、我願力に乗じて若し生ぜずば正覺を取らじと。

往生禮讚に同く上の文を引きて云く、若し我成佛せんに、十方の衆生、我名號を稱すること下十聲に至るまで、若し生ぜずば正覺を取らじ。彼の佛いま現に世

にましまして成佛したまへり、當に知るべし本誓重願虚からざることを、衆生稱念すれば必ず往生を得と。

私（法然上人）に云く、第十八の念佛往生の願とは、彼諸佛の土の中に於て、或は布施を以て往生の行と爲すの土あり、或は持戒を以て往生の行と爲すの土あり、或は起立塔像飯食沙門及び孝養父母奉事師長等の種々の行をもて各往生の行と爲すの國土等あり、或は専ら其國の佛の名を稱して往生の行と爲すの土あり、是の如く往生の行種々不同なり具に述べべからず。即ち今前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨て、専ら佛號を稱するを選び取る、故に選擇と云ふなり。何が故ぞ第十八願に一切の諸行を選び捨て、唯偏に念佛の一行を選び取りて往生の本願と爲したまふや。

答て曰く聖意測り難したやす輒く解すること能はず、然りと雖今試に二義を以て之を解せん。一には勝劣の義二には難易の義なり。初には勝劣とは念佛は是れ勝、餘

行は是れ劣なり、所以はいかん、名號は萬徳の歸する所なり、然れば前ち彌陀一佛の所有の四智、三身、十力、四無畏等の一切の内証の功德、相好、光明、說法、利生の外用の功德皆悉く阿彌陀佛の名號の中に攝在す、故に名號の功德最も勝れたりと爲すなり。餘行は然らず各一隅を守る是を以て劣と爲す。故に劣を捨て、勝を取りて以て本願と爲したまふか。次に難易の義とは念佛は修し易く諸行は修し難し、念佛は易きが故に一切に通ず、諸行は難きが故に諸機に通せず、然れば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんが爲に、難を捨て易を取りて以て本願と爲したまふか。

三

念佛の行者必ず三心を具足すべきの文。

觀無量壽經に云く、若し衆生ありて彼國に生せんと願すれば、三種の心を發し

て即ち往生す。何等をか三となす、一には至誠心二には深心三には廻向發願心なり、三心を具すれば必ず彼國に生ず。

同經の疏(善導大師作)に云く、一者至誠心、至とは眞なり誠とは實なり、一切衆生の身口意業に修する所の解行、必ず須らく眞實心中に作すべきことを明さんと欲す、外に賢善精進の相を現じ、内に虚假をいなくことを得ざれ。二者深心、深心といふは即ち是れ深く信するの心なり、また二種あり、一には決定して深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫なり、曠劫より已來常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと信す。二には決定して深く彼阿彌陀佛の四十八願をもて衆生を攝受したまふ、疑なく慮りなく彼願力に乗じて定めて往生を得と信す。三者廻向發願心、廻向發願心といふは自他所修の善根を以て、悉くみな眞實深信の心の中に廻向して彼國に生せんと願す、故に廻向發願心と名くるなり。三心既に具すれば行として成せざるなし、願行既に成じて若し生ぜずんば是のことはりある事なし、

往生禮讚に云く若し一心を少きぬれば即ち生ずることを得ず。

私に云く、引く所の三心は是れ行者の至要なり、所以はいかん、經には則ち三心を具すれば必ず彼國に生ずと云ふ、明に知ぬ三を具すれば必ず應に生ずることを得べし。釋には則ち若し一心を少きぬれば即ち生ずることを得ずと云ふ、明に知ぬ一少けぬれば是れ更に不可なり。これに因りて極樂に生せんと欲はん人は全く三心を具すべし。

深心とは謂く深く信するの心なり、當に知るべし生死の家には疑を以て所止と爲し涅槃の城には信を以て能入となす。故に今二種の信心を建立して九品の往生を決定するものなり。

四

計みればそれ速かに生死を離れんと欲はぶ、二種の勝法の中に且しはらく聖道門さしらを開

きて選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲はぶ正雜二行の中に、且く諸の雜行を抛ちて選んで應に正行に歸すべし。正行を修せんと欲はぶ正助二業の中に、猶ほ助業を傍にして選んで應に正定を専らにすべし。正定の業とは即ち是れ佛名を稱するなり、名を稱すれば必ず生ずることを得、佛の本願に依るが故に。(法然上人選)

一枚起請文

もろこし我が朝に、もろくの智者達のさたし申さると觀念の念にも非ず、また學文をして念の心を悟りて申す念佛にも非ず。たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申て、疑なく往生するぞと思ひとりて申す外に別の仔細候はず。但し三心四修と申す事の候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内にこもりて候也。此外におくふかき事を存せば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし

念佛を信せん人は、たとひ一代の法を能々學すとも、一文不知の愚ごんの身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまいをせずして唯一向に念佛すべし。爲證以三兩手印一

淨土宗の安心起行、此一紙に至極せり。源空が所存此外に全く別義を存せず、滅後の邪義をふせがなが爲に所存を記し畢。

建曆二年正月二十三日

源空 在判

其佛の本願の力、名を聞きて往生せんご欲へば、皆悉く彼國に到りて、自ら不退轉に致る。

(大無量壽經)

親鸞聖人

一 御傳鈔

黒谷の先徳源空在世のむかし、矜哀のあまり、あるときは恩許を蒙て製作を見寫し、或時は眞筆を降して名字を書き賜す、すなはち顯淨土方便化身土文類六に云く親鸞聖人選述しかるに愚禿釋の鸞、建仁辛の酉の曆、雜行をすて、本願に歸す。元久乙の丑の歲、恩怨を蒙りて選擇を書しき。同きとし初夏中旬第四日、選擇本願念佛集の内題の字、ならびに南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と、釋の綽空の字と、空の眞筆をもて之を書しめたまひき、同日空の眞影まうし預りて圖畫したてまつる。同二年閏七月下旬第九日、眞影の銘は眞筆をもて南無阿彌陀佛と、若我成佛、十方生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知、本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生(善道大師禮讚文)の眞文とを書しめ

たまひき。又夢の告によりて綽空の字を改めて、同日御筆をもて名の字を書しめ
たまひをはんぬ。本師聖人今年七旬三の御歳なり。選擇本願念佛集は禪定博陸兼
實の教命によりて選集せしめたまふ所なり、眞宗の簡要念佛の奥義これに攝在せ
り、見るもの論さだまりやすし誠にこれ希有最勝の華文、無上甚深の寶典なり。年を涉り
日を涉りて、その教誨を蒙ふる人、千萬なりといへども、親といひ疎といひ、こ
の見寫をうる徒は甚以てかたし、しかるにすでに製作を書寫し、眞影を圖書せり
これ專念正業の徳なり、これ決定往生の徴しるしなり、よりて悲喜の涙を抑へて由來の
縁をしるす。(傳文第五段覺如上人作)

二 末 燈 鈔

一、尋ね仰られ候念佛の不審の事、念佛往生と信する人は邊地の往生とて、さら
はれ候らんこと、おほかたこゝろえ難く候。そのゆへは彌陀の本願と申すは、名

號をとなへんものをば、極樂へむかへんと誓わせ給ひたるを、深く信じてとなふ
るが目出度事にて候なり。信心ありとも名號をとなへざらんは詮なく候。又一向
名號をとなふとも信心あさくば往生しがたく候。されば念佛往生と信じて、しか
も名號をとなへんづるは疑ひ無き報土の往生にてあるべく候なり。詮するところ
名號をとなふと云ふとも、他力本願を信せざらんは邊地にむまるべし。本願他力
を深く信せんともがらは、何事にかは邊地を往生にて候べき、このやうをよくよ
く御こゝろへ候べし。此身はいまはとしきはまりて候へば、定めて先だちて往生
し候はんずれば、淨土にて必ずくまちなまいらせ候べし、あなかしこく。

一。四月七日の御ふみ五月二十六日たしかに見候ひぬ。さては仰せられたる事、
信の一念、行の一念、二つなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはな
れたる信の一念もなし。その故は、行と申すは本願の名號を一聲となへて、往生
すと申すことを聞きて、一聲をもとなへ若しは十念をもせんは行なり。この御誓

をきいて疑ふ心の少しも無きを信の一念とまうすなり。信と行と二ときげども、行を一聲するぞとききて疑はねば、行を離れたる信はなしとききて候。また信をはなれたる行なしとおぼしめすべし、これ皆彌陀の御ちかひと申ことを心得べし、行と信とは御誓を申すなり。穴賢く。いのち候はば必ずのぼらせ給ふべし。

一。誓願名號と申してかはりたる事候はず。誓願をはなれたる名號も候はず、名號を離れたる誓願も候はず候。かく申し候ふも、はからひにて候なり。たゞ誓を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつる上は、何條わがはからいを出すべき、聞わけ知りわくるなど、わづらはしくはおほせられ候ふやらん、これみなひがごとにて候なり。たゞ不思議と信じつる上は、とかく御はからひあるべからず候。往生の業には私のはからひはあるましく候なり。

一。往生は何事もく凡夫のはからひならず、如來の御ちかひにまかせ參らせたればこそ他力にては候らへ、様々にはからひあふて候ふらんおかし候。如來

の誓願を信する心の定まると申すは、攝取不捨の利益に預る故に不退の位に定まると御心得候ふべし。眞實信心の定まると申も、金剛の信心の定まると申すも攝取不捨の故に申なり。さればこそ無上覺に至るべき心のおこると申なり。これを不退の位とも申し、正定聚の位に至るとも申し、等正覺に至るとも申なり。この心の定まるを十方諸佛のよろこびて、諸佛の御心に等しとほめ給ふなり。この故にまことの信心の人をば諸佛と等しと申なり、又補處の彌勒とおなじとも申なり、この世にて眞實信心の人をまもらせ給へばこそ、阿彌陀經には十方恒沙の諸佛護念すと申す事にては候へ、安樂淨土へ往生してのちに護り給ふと申す事にては候はず、娑婆世界に至る程、護念すと申す事なり。信心まことなる人の心を十方恒沙の如來のほめ給へば、佛とひとしと申すことなり、又他力と申す事は義なきを義とすと申すなり、義と申す事は行者のをくのはからふことを義とは申すなり。如來の誓願は不思議にまします故に佛と佛との御はからひなり、凡夫の

はからひに非ず、補處の彌勒菩薩を初めとして佛智の不思議をはからふべき人は候はず、然れば如來の誓願には義なきを義とすとは大師聖人の仰せに候へき、この心の外に往生にいるべき事候はずと心得て、まかりすぎ候へば人のおほせごとにはいらぬものにて候なり。

一、かまへて學生沙汰せさせ給ひ候はで、往生をとげさせたまひ候ふべし。故法然聖人は淨土宗の人は愚人になりて往生すと候ひし事を、たしかにうけたまはり候しうへに、ものも覺えぬ淺間しき人々の参りたるを御覽じては、往生必定すべしとて、ゑませ給ひしを見まいらせ候ひき、文沙汰してさがしき人の参りたるをば往生いかゞあらんと、たしかに受給はりき、今に至る迄思ひあはせられ候なり。(親鸞聖人御文)

三 歎異鈔

一。彌陀の誓願不思議に助けられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛申さんと思ひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。その故は罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信せんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき故に、惡もおそろるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきが故にと。云云。

(第一節)

一。各々十餘箇國のさかひをこえて、身命をかへりみづして、たづねきたらしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極樂の道をとひきかんがためなり。しかるに、念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと心にくおぼしめしおはしましてはんべらんは、大きなあやまりなり。もししからは、南都北嶺にも、ゆるしき學生たち、おほく座せられて候ふなれば、かのひとく

にもあひたてまつりて、往生の要よく／＼きかるべきなり。親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをかうふりて、信ずる外に別の仔細なきなり。念佛は誠に淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候。其故は自餘の行をばげみて佛になるべかりける身が、念佛を申して地獄にもおちて候はゞこそ、すかされたてまつりてといふ、後悔も候らはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず。佛説まことにおはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞が申すむね、又もてむなしかるべからず候か。詮するところは、愚身が信心におきては、かくの如し。この上は念佛

を取りて信じ奉らんとも、又捨てんとも面々の御はからひなりと。云云。(第二節)
一。念佛には、無義をもて義とす、不可稱不可説不可思議の故にと、おほせさせさふらひき。

一。一文不通のともがらの念佛まうすにあふて、なんぢは誓願不思議を信じて念佛申すか、又名號不思議を信ずるかと、いひおざかして、二つの不思議の仔細をも分明にいひひらかずして、人の心をまごはすこと、この條かへす／＼も、心をとどめて、思ひわくべきことなり。誓願の不思議によりて、たもちやすく、となへやすき名號を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものを、むかへんと御約束あることなれば、まづ大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいづべしと信じて、念佛申さるゝも、如來の御はからひなりと思へば、少しも自らの計らいまじわらざる故に、本願に相應じて眞實報土に往生するなり。これは誓願の不思議をむねと信じ奉れば、名號の不思議も具足して、誓願名號の不思議一

つにして更に異なる事なきなり。次に自らの計をさしはさみて、善惡二つにつき
て往生のたすけさはり、二様に思ふは、誓願の不思議をば頼まづして、我心に往
生の業をあげみて、申すところの念佛をも自行になすなり。この人は名號の不思
議をもまた信せざるなり。信せざれども邊地懈慢疑城胎宮にも往生して、果遂の
願の故につるに報土に生ずるは、名號不思議の力なり。これすなはち誓願不思議
の故なればたゞ一つなるべし。(第十一節如信上人作)

五逆十惡の愚人、命終る時、佛名を稱するが故に、念念の中に
於て八十億劫の生死の罪を除き、金蓮華を見る、即ち極樂世界に
往生することを得ん。

(觀無量壽經)

五、親鸞聖人教行信証鈔要

ひそかにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明
の闇を破する慧日なり。圓融至徳の嘉號は惡を轉じ徳を成す正智、難信金剛の信
樂は疑を除き證をえしむる眞理なりと。しかれば凡小修し易き眞教、愚鈍往きや
すき捷徑なり、惡重く障多きもの、特に如來の發遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に歸
して、専ら斯の行に奉へ、唯だ斯の信を崇めよ。憶弘誓の強縁は多生にも値ひが
たく、眞實の淨信は億劫にもえがたし、たま〜行信をえば遠く宿縁をよろこ
べ。(總序)

謹んで淨土眞宗を按ずるに二種の廻向あり。一には往相、二には還相なり。往相の廻向に就いて眞實の教行信証あり。

これ眞實の教をあらはさば、則ち大無量壽經これなり、こゝを以て如來の本願を説くを經の宗致となし、即ち佛の名號を以て經の体となす。(教卷)

三

諸佛稱名之願 淨土眞實之行選擇本願之行

一。謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり大信あり。大行といふは則ち無碍光如來の名みなを稱するなり。この行は即ちこれ諸の善法を攝し、諸の徳本を具せり、極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり、故に大行と名づく。然るにこの行は大悲の願より出でたり、即ちこれを諸佛稱揚之願と名づけ、また諸佛稱名之願と名づけまた諸佛咨嗟しつ之願と名づく、また往相廻向之願と名づく、また選擇稱名之願と

名づくべきなり。

二。しかれば稱名はよく衆生の一切の無明を破し。よく衆生の一切の志願をみてたまふ。稱名は則ち是れ最勝眞妙の正業なり、正業は則ち是れ念佛なり、念佛は則ち是れ南無阿彌陀佛なり、南無阿彌陀佛は則ち是れ正念なり。至明しに知んぬ是れ凡聖自力之行に非ず、故に不廻向之行となづくるなり、大小の聖人、重輕の惡人、皆同じくひとしくまさきまに選擇の大寶海に歸して念佛成佛すべし。

三。しかれば眞實の行信をうれば、心に歡喜多きが故に歡喜地となづく、いかに況んや十方群生海、この行信に歸命すれば攝取して捨てたまはず、故に阿彌陀佛と名づけたてまつる、是を他力といふ。是を以て龍樹大士は即時入必定といへり、曇鸞大師は入正定聚之數といへり。仰いでこれをたのむべし、専らこれを行すべきなり。まことに知んぬ、徳號の慈父ましまさずば能生の因かけなん。光明の慈母ましまさずば所生の縁そむさなん。能所の因縁和合す可しと雖も、信心の業識に

非ずば光明土にいたることなし。眞實信の業識これすなはち内因とす、光明名の父母これすなはち外縁となす、内外の因縁和合して報土の眞身を得証す。故に宗師は光明名號を以て十方を攝化せつけしたまふ、たゞ信心をして求念せしむと言へり。また念佛成佛是れ眞宗といへり。凡そ往相廻向の行信について、行にすなはち一念あり、また信に一念あり。行の一念といふは、いはく稱名の徧數について選擇易行の至極を顯開す。

四。まことに知んぬ大利無上は一乘眞實の利益なり、小利有上は八萬四千の假門なり。釋に專心といへるは一心なり、二心なきことをあらはす、專心といへるは一行なり、二行なきことをあらはす。今彌勒みろく附屬の一念はこれ一聲なり、一聲即ちこれ一念なり、一念即ち一行なり、一行即ちこれ正行なり、即ちこれ正業なり、正業即ちこれ正念なり、正念即ち是れ念佛なり、則ちこれ南無阿彌陀佛なり。しかれば大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮みぬれば、至徳の風しづかに衆禍の

波轉ず、即ち無明の闇を破し、速に無量光明土にいたりて大般涅槃はつねはんを証し、普賢の徳にしたがふなり。

五。一乗海といふは、一乗は大乗なり、大乗は佛乘なり、一乗をうる者は阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみょうさんぼだいをうるなり、阿耨菩提は即ち是れ涅槃界なり、涅槃界は究竟法身なり。乃大乗は二乗三乗あることなし、二乗三乗は一乗に入らしめんとなり、一乗は即ち第一義乘なり、唯だ是れ誓願一佛乘なり。

凡そ誓願について眞實の行信あり、また方便の行信あり。その眞實行の願は諸佛稱名の願なり、その眞實信の願は至心信樂の願なり、これすなはち選擇本願の行信なり。その機は則ち一切善惡大小凡愚なり。往生は則ち難思議往生なり。佛土は報佛報土なり。これすなはち誓願不可思議一實眞如海なり。大無量壽經之宗致、他力眞宗の正意なり。

六。しかれば大聖の眞言に歸し、太祖の解釋を閲して、佛恩の深遠なるを信知し

て正信念佛偈を作りていはく。

無量壽如來に歸命し。不可思議光に南無したてまつる。法藏菩薩因位の時世自在王佛のみこにまして。無上殊勝の願を建立し、希有大弘誓を超發せり。五劫に之を思惟し攝受す。重ねて誓ふらくば名聲十方に聞えんと。

本願の名號は正定の業なり。至心信樂の願を因となす。等覺をなり大涅槃を証するは。必死滅度の願成就のゆゑなり。如來世に興出したまふ所以は。彌陀の本願海を説かんとなり。五濁惡時の群生海まさに如來如實の言を信すべし。(行卷)

四

一。それおもんみれば、信樂を獲得するとは如來選擇の願心より發起す、真心を開闡するとは大聖矜哀の善巧より顯彰せり。しかるに末代の道俗、近世の宗師、自性唯心に沈んで淨土の眞証を貶め、定散の自心に迷ふて金剛の眞信にくらし。(別序)

至心信樂之願 正定聚之機

二、謹んで往相之廻向を按ずるに大信あり。大信心とは則ちこれ長生不死の神方、忻淨厭穢之妙術、選擇廻向之真心、利他深廣之信樂、金剛不壞之真心、易往無人之淨信、心光攝護之一心、希有最勝之大信、世間難信之捷徑、証大涅槃之眞因、極速圓融之白道、眞如一實之信海なり。この心即ちこれ念佛往生之願より出でたり、この大願を選択本願と名づく、また本願三心之願と名づく、また至心信樂の願と名づく、また往相信心の願と名づくべきなり。しかるに常没の凡愚流轉の群生無上妙果の成じ難きにはあらず、眞實の信樂まことに獲ること難し。何を以ての故に、乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣惠の力に因るが故なり。たましく淨信をえば、この心顛倒せず、是の心虛偽ならず。こゝを以て極惡深重の衆生大慶喜心をえ、諸の聖尊の重愛をうるなり。

三、如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て、三業の所修一

念一刹那も清淨ならざることなし、真心ならざることなし。如來清淨の真心を以て、圓融無碍、不可思議、不可稱、不可説の至徳を成就したまへり。如來の至心を以て諸有の一切煩惱、惡業、邪智の群生海に回施したまへり。則ちこれ利他の真心をあらはす、故に疑蓋雜はることなし。この至心は則ちこれ至徳の尊號をその体とするなり。

四。信樂といふは如來の満足、大悲、圓融、無碍の信心海なり。疑蓋間雜あることなし、利他廻向の至心を以て体とするなり。虛假雜毒の善を以て無量光明土に生せんとする、これ必ず不可なり。この心は如來の大悲心なるが故に、必ず報土の正因となる。如來苦惱の群生海を悲憐して無碍廣大の淨信を以て、諸有海に廻施したまへり、是を利他眞實の信心と名づく。本願信心の願成就の文經にのたまはく、諸有衆生その名號をききて、信心歡喜せんこと乃至一念せん。

五。欲生と云ふは則ちこれ如來諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。眞實の信

樂を欲生の体とするなり、大、小、凡聖、定散自力之廻向にあらず。利他眞實の欲生心を以て、諸有海に廻施したまへり。欲生は即ちこれ廻向心なり。

六。まことに至心、信樂、欲生そのことば異りといへどもその意これひとつなり何をもての故に、三心すでに疑蓋まじはることなし、かるが故に眞實の一心これを金剛の真心となづく。金剛の真心これを眞實の信心となづく。眞實の信心はかならず名號を具す、名號はかならずしも願力の信心を具せざるなり。このゆへに論主はじめに我一心とのたまへり、また彼名義の如く、實の如く、修行相應せんとするが故にとのたまへり。おほよそ大信心海を按ずれば、貴賤縑素をえらばず男女老少をいはず、造罪の多少をとはず、修行の久近を論せず、行にあらず、善にあらず、頓にあらず、漸にあらず、定にあらず、散にあらず、正觀にあらず、邪觀にあらず、有念にあらず、無念にあらず、尋常にあらず、臨終にあらず、多念にあらず、一念にあらず、たゞこれ不可思議、不可稱、不可説の信樂なり。

七。それ眞實信樂を案するに、一念あり。これ信樂開發の時尅の極促をあらはし廣大難思の慶心をあらはす。ことをもて大經にのたまはく、あらゆる衆生、その名號をききて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん、至心に廻向したまへり、かの國に生せんと願すれば、すなはち往生をえ、不退轉に住せん。聞といふは衆生佛願の生起本末を開きて疑心あること無し、是を聞といふなり。信心といふは則ち本願力廻向之信心なり。歡喜といふは身心悅豫をあらはす貌なり。乃至といふは多少を攝するの言なり。一念といふは信心二心なきが故に一念といふ、是を一心となづく。則ち清淨報土の眞因なり。金剛の眞心を護得する者は、横に五趣八難の道を超え、必ず現生に十種の益をう一には冥衆護持の益、二には至徳具足の益三には轉惡成善の益、四には諸佛護念の益、之には諸佛稱讚の益、六には心光常護の益、七には心多歡喜の益、八には知恩報徳の益、九には常行大悲の益、十には入正定聚の益なり。宗師の專念といへるは一行なり、專心といへるは一心なり。

八。まことに知んぬ、彌勒大士は等覺の金剛心を窮むるが故に、龍華三會の曉に無上覺位を極むべし。念佛の衆生は横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕に大般涅槃を超証す。是れ即ち往相廻向之眞心徹到するが故に、不可思議之本誓によるが故なり。(信卷)

五

心至滅度之願 難思議往生

一。謹んで眞實証をあらはさば、則ちこれ利他圓滿之妙位、無上涅槃之極果なり。即ちこれ必至滅度之願より出でたり。また証大涅槃之願と名づくるなり。然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行をうれば、即時に大乘正定聚之數に入るなり、正定聚に住するが故に、必ず滅度にいたる、滅度にいたれば常樂なり、常樂は畢竟寂滅なり、寂滅は無上涅槃、無上涅槃は無爲法身、無爲法身

は實相なり、實相は法性、法性は眞如、眞如は即ち一如なり。然れば彌陀如來は如より來生して、報應化種々の身を示現したまふ。

二。それ眞宗の教行信証を案すれば、如來の大悲廻向の利益なり。故に若は因、若は果、一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまへる所にあらざることなし、因淨なるが故に果また淨なり。

三。還相廻向といふは即ちこれ利他教化地の益なり。則ち是れ必至補處之願より出でたり。また一生補處之願と名づく、また還相廻向之願と名づくべきなり。

(証卷)

六

光明無量之願

壽命無量之願

謹んで眞佛土を按ずれば佛は則ちこれ不可思議光如來なり。土はまたこれ無量光明土なり。然れば則ち大悲の誓願に酬報す。故に眞の報佛土といふ。既にして願まします、即ち光明壽命之願是れなり。(眞佛土卷)

七

至心發願之願

邪定聚の機。雙樹林下往生。無量壽佛觀經之意なり。

至心廻向之願

不定聚の機。雖思往生。阿彌陀經の意なり。

一。濁世の群萌、いまし九十五種の邪道を出で、半滿權實の法門に入ると雖も、眞なる者は甚だもて難く、實なる者は甚だもて希なり、僞なる者は甚だもて多く虚なる者甚だもて滋し。是を以て釋迦牟尼佛、福德藏を顯説して群生海を誘引し。阿彌陀如來もと誓願を發して普く諸有海を化したまふ。既にして悲願まします修諸功德の願となづく、また臨終現前の願となづく。

二。大無量壽經によるに眞實と方便の願を超發す。また觀經に方便と眞實の教を顯彰す。阿彌陀經には唯眞門を開きて方便之善無し。是を以て三經の眞實は選擇本願を宗とするなり。また三經の方便は諸の善根を修するを要とするなり。これによりて方便の願を按ずるに、假あり眞あり、また行あり信あり。願といふは臨終現前の願なり。行といふは修諸功德の善なり。信をいふは至心發願欲生の願なり。この願の行信によりて淨土の要門、方便、權假を顯開す。

此の要門より正、助、雜の三行を出せり。此の正助の中に就いて專修あり雜修あり。機に就いて二種あり、一には定機二には散機あり。又二種の三心あり。亦二種の往生あり。二種の三心といふは一には定の三心二には散の三心なり、定散の心は即ち自利各別の心なり。(第十九願)

三。然るに常没の凡愚、定心修し難し息慮凝心故に、散心行じ難し廢惡修善の故に是を以て立相住心尙ほ成じ難し、故にたとひ千年の壽を盡すとも、法眼未だ曾て

開けじと言へり、何に況んや無相離念まことに獲難し、故に如來はるかに未代罪濁の凡夫を知しめす、立相住心尙ほ得ること能はずと。何に況んや相を離れて而も事を求むる者は、術通無き人の空に居して舍を立てんが如しと言へり。

凡そ一代の教に就いて、此の略の中に於て入聖得果するを聖道門と名く難行道と云へり。安養淨刹に於て入聖證果するを淨土門と名く易行道と云へり。此門の中に就いて横出、横超、假眞、漸頓、助正、雜行、雜修あるなり。横超といふは本願を憶念して自力之心を離る專修といふは唯佛名を稱念して自力之心を離る、是を横超他力と名くるなり、これ即ち專中之專、頓中之頓、眞中の眞、乗中之一乗なり、これ乃ち眞宗なり。

四。方便眞門の誓願について行あり信あり、また眞實あり方便あり。願といふは植諸徳本の願是なり。行といふは善本徳本なり。信といふは至心廻向欲生の心是なり。經家は一切諸行の少善を嫌貶して善本徳本の眞門を開示し、自利の一心

を勵まして難思の往生をすむ。(二十願)

五。それ濁世の道俗まさに速かに圓修至徳の眞門に入りて難思往生を願ふべし。眞門の方便について善本あり徳本あり、また定専心あり、また散専心あり、また定散雑心あり。雑心といふは大小、凡聖、一切善惡、各助正、間雜の心を以て名號を稱念す。まことに教は頓にして根は漸機なり。行は專にして心は間雜す、故に雑心といふ。定散之専心とは罪福を信する心を以て本願力を願求す、是を自力之専心となづくるなり。善本といふは如來の嘉名なり、この嘉名は萬善圓備せり、一切善法の本なり、故に善本といふなり。徳本といふは如來の徳號なり、この徳號は一聲稱念するに、至徳成滿し衆禍みな轉ず、十方三世の徳號の本なり、故に徳本といふなり。然れば則ち釋迦牟尼佛は功德藏を開演して十方濁世を勸化したまふ、阿彌陀如來はもと果遂の誓を發して諸有の群生海を悲引したまへり。既にして悲願まします、植諸徳本の願となづく、また係念定生の願となづく、また不

果遂者の願となづく、また至心廻向の願となづくべきなり。

五。専修にして雑心なる者は大慶喜心をえず。故に宗師は彼の佛恩を念報することなし、業行を作すと雖、心に輕慢を生じ、常に名利と相應するが故に、人我自ら覆ふて同行善知識に親近せざるが故に、樂んで雜縁に近づきて往生の正行を自障々他するが故にといへり。悲しき哉、垢障の凡愚、無際よりこのかた助正間雜し、定散心雜るが故に、出離その期なし。自ら流轉輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども佛願力に歸しがたく大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし、深く悲嘆すべし。凡そ大小聖人一切善人、本願の嘉號を以て己が善根とするが故に、信を生ずること能はず、佛智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能はざるが故に、報土に入ることなきなり。

六。是を以て愚禿釋の戀、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によりて、久しく萬行諸善の假門を出でて、永く雙樹林下の往生を離る。善本徳本の眞門に廻入して、

偏に難思往生の心を發しき。然るに今、ことに方便の眞門を出で、選擇の願海に轉入せり、速かに難思往生の心を離れて離思議往生を遂げんと欲ふ。果遂の誓まここに由ある哉。ここに久しく願海に入りて深く佛恩を知れり。至徳を報謝せんがために、眞宗の簡要をひろうて恒常に不可思議の徳海を稱念す、いよ／＼斯を喜愛し特に斯を頂戴するなり。

慶ばしき哉心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如來の矜哀を知りて、まことに恩厚を仰ぐ、慶喜いよ／＼いたり、至孝いよ／＼重し。これによりて眞宗の詮を鈔し、淨土の要をひろふ。唯佛恩の深きことを念ふて人倫の嘲を耻ぢす。若し斯の書を見聞せん者は、信順を因となし疑謗を縁となして、信樂を願力に彰し妙果を安養に顯はさん。(化身土卷)

三願三機三往生圖解

第一圖

八萬四千之假門

豎超即身是佛
豎出自力中之漸教
歷劫修行也

難行道聖道門自利眞實
此土入聖得果 自力

- 第十九願 邪定聚機 雙樹林下往生
- 第二十願 不定聚機 難思往生
- 第十八願 正定聚機 難思議往生

橫出他力中之自力
定散諸行也

易行道淨土門利他眞實
彼土入聖証果 他力

第二圖

- 第十九願 修諸功德(行) 至心發願欲生(信) 現其人前不取正覺(誓) (隨他意)
- 第二十願 植諸徳本(行) 至心回向欲生(信) 不果遂者不取正覺(誓) (隨他意)
- 第十八願 至心信樂欲生(信) 乃至十念(行) 若不生者不取正覺(誓) (隨自意)

第三圖

第十九願	要門	方便假門	方便中之假 他力中之自力	要弘對(念佛爲本) 真假該通
第二十願	眞門	方便眞門	方便中之眞 他力中之自力	眞弘對(信心爲本) 信假分判
第十八願	弘願	眞如門	誓願一佛乘 弘願他力	

第四圖

第十九願	行助業	正定業(第四稱名正行)專修 (讀誦、觀察、禮拜、讚嘆供養正行)	雜修	(信) 定散之信	定心者息慮凝心、散心者廢惡修善、自利之心
第二十願	行	大善大功徳之念佛之一行		(信) 定散之信	定專心、散專心、定散雜心、自利之心
第十八願	行	非行非善他力回向之念佛之大行		(信) 他力回向之信	利他眞實之心

六、唯信鈔、後世物語、自力他力、

唯信鈔

それ生死をはなれ佛道を成らんと思はんには二つの道あるべし。一つには聖道門二つには淨土門なり。淨土門と云は、今生の行業を廻向して順次生は淨土に生じて、淨土にして、菩薩の行を具足して佛にならんと願するなり。この門は末代の機にかなへり。誠にたくみなりとす、此門に又二つのすぢわかれたり、一つには諸行往生、二つには念佛往生なり、諸行往生と云ふは或は父母に孝養し、あるひは師長に奉事し、或は五戒八戒をたもち、或は布施忍辱を行じ、乃至三密一乘の行をめぐらして、淨土に往生せんと願ふなり。これ皆往生をとげざるにあらず一切の行は皆これ淨土の行なるが故に、たゞこれは自らの行をはげみて、往生を願ふが故に自力の往生となづく。行業もしをろそかならば、往生とげがたし、彼

阿彌陀佛の本願にあらず攝取の光明の照らざるゝところなり。二つに念佛往生と云ふは、阿彌陀佛の名號をとなへて、往生を願ふなり。これは彼の本願に順するが故に正定の業となづく。ひといに彌陀の願力にひかるゝ故に他力の往生と名づく。そもく名號を稱ふるは、なにの故に、かの佛の本願にかなふとは云ふと云ふに、そのことをこりは、阿彌陀如來未だ佛になり給わざりし昔、法藏比丘と申しき、其時に佛ましくしき、世自在王佛と申しき、法藏比丘すでに菩提心ををこして清淨の國土をしめして、衆生を利益せんとおぼして佛のみ許へ參りて申したまはく我すでに菩提心をおこして、清淨の佛國をまうけむと思ふ。願わくば佛我ために廣く佛國を莊嚴する无量の妙行を教へ給へと、其時に世自在王佛二百一十億の諸佛の淨土の人天の善惡、國土の巖妙を、ことごとく之をとき、ことごとく是を現し給ひき。法藏比丘之を聞き、これを見て惡をきらいて善をとり、麤をすてゝ妙を願ふ。例へば三惡道ある國土をば是をえらびてとらず。三惡道なき世界を

ばこれを願ひてすなはち取る、自餘の願もこれになづらへて心得べし。この故に二百一十億の諸佛の淨土の中より、すぐれたる事をえらび取りて極樂世界を建立したまへり、たとへば柳の枝に櫻の花を咲かせ、二見の浦に清見が關を並べたらむがごとし。之をえらぶ事一期の按にあらず、五劫の間思惟し給へり。かくの如く微妙嚴淨の國土をまうけむと願じて重ねて思惟したまはく。

國土をまうくる事は、衆生をみちびかんためなり。國土妙へなりと云ふとも、衆生生れ難くば大悲大願の意趣にたがひなんとす。是によりて往生極樂の別因を定めんとするに、一切の行、みなたやすからず。孝養父母をとらんとすれば。不孝の者は生るべからず。讀誦大乘をもちえんとすれば、文句を知らざる者は望みがたし。布施持戒を因と定めんとすれば、慳貪破戒のともがらはもれなんとす。忍辱精進の業とせんとすれば、瞋恚懈怠のたぐひはすてられぬべし。餘の一切の行は皆又かくの如し。是によりて一切の善惡の凡夫ひとしく生れ、共に願はしめ

んがために、たゞ阿彌陀の三字の名號をとなへんを往生極樂の別因とせんと、五劫のあいだ深く此事を思惟しおはりて、第十七に諸佛に我名字を稱揚せられんと云ふ願をおこし給へり。此の願深く之を心得べし。名號をもて、あまねく衆生を導かんとおぼしめす故に、かづ／＼名號を、ほめられむと誓へ給へるなり。しからずは佛の御心に名譽を願ふべからず。諸佛にほめられて何の之か要かあらむ。

如來尊號甚分明

十方世界普流行

但_レ有_ニ稱名_一皆得_ニ往_ク

觀音勢至自_ラ來迎_シ

といへる此の心か。さてつぎに第十八に念佛往生の願をおこして十念のものをも皆導かんとのたまへり。誠につらく／＼これを思ふに、この願はなほだ弘深なり。名號はわづかに、六字なれば盤持が、ともがらなりとも、たもち安く是を稱ふるに行住坐臥をえらばず。是を行するに時處諸縁をきはらず、在家出家若男若女老少善惡の人をもわかず、なにの人かこれにもれん。

次にこの念佛往生の門につきて、專修雜修の二行わかれたり。專修といふは、極樂をねがふ心をつくし、本願をたのみ信をおこすより、たゞ念佛の一行をつめて全く餘行をまちいざるなり。他の經咒をも、たもたす餘の佛菩薩をも念せずたゞ彌陀の名號をとなへ、ひとへに彌陀一佛を念する、これを專修と名づく。雜行といふは念佛をむねとすと雖、また餘の行をもならべ、他の善をも兼ねたるなり。この二つの中には專修をすぐれたりとす、そのゆいは、すでに偏に極樂を願ふ、かの土の教主を念せん外に何の故か他をまじへん、電光朝露の命芭蕉泡沫の身わずかに一世の勤修をもちて、たちまちに、五趣の古郷をはなれんとす。あにゆるく諸行をかねんや。諸佛菩薩の結縁は隨心供佛のあしたを期すべし。大小經典の義理は百法明門のゆふべを待つべし、一土を願ひ一佛を念する外はその用あるべからずと云ふなり。念佛の門に入りながら、なほ餘行をかねたる人は、其心を尋ぬるに、おの／＼本業を執して、すてがたく思ふなり。或は一乘をたもち三密

を行する人はおの／＼其行を廻向して、淨土をねがはんと思ふ心を改めずして、念佛にならべて是をつとむるに、何のそがかあらんと思ふなり。たゞちに本願に順せる易行の念佛をつとめずして、なほ本願にえらばれし諸行をならべん事の、よしなきなり。之によりて善導和尚のたまわく、專をすてゝ雜におもむくものは千の中に一人も生れず。もし專修のものは、百に百必ず生れ千に千必ず生るといへり。これにつきて人疑ひをなさく、人ありて念佛の行をたてゝ、毎日一萬返をとなへて、その外はひめもす遊び暮し、夜もすがらねむり居らんと、又同じく一萬返を申してそのうち經をもよみ餘佛を念せんと、いづれかすぐれたるべき。法華に即往安樂の文あり。これを讀まん遊びたはぶれんに同じからむや。藥師には八菩薩の引導ありこれを念せんは、むなく眠らんに似るべからず。彼れを專修とほめ、之を雜修とせきはむ事、未だ其ころを得ずと。今又之を按ずるに、なほ專修をすぐれたりとす。其故はもとより濁世の凡夫なり、殊にふれてさ

はり多し、彌陀これをかながみて易行の道を教へたまへり。ひめもすに遊びたはぶるゝは散亂増のものなり。夜もすがら眠るは睡眠増のものなり。これ皆煩惱の所爲なり。たちがたく伏しがたし、あそびやまば、念佛を稱え、ねぶりさめば本願を思ひいづべし、專修の行にそむかず。一萬返を稱えて、そのうち他經他佛を持念せむは、うちきくところ、たくみなれ共、念佛誰か一萬返にかざれと定めし。精進の機ならば、ひめもすにとなふべし。念珠をとらば、彌陀の名號をとなふべし、本尊に向はば彌陀の形像に向ふべし。行者の根性に上中下あり。上根のものは、夜もすがら日くらし念佛を申すべし。何のいとまにが餘佛を念せん深くこれを思ふべし。みだりがはしく疑ふべからず。

次に念佛を申さんには三心を具すべしと。その三心と云ふは、一つには至誠心、これすなはち眞實の心なり。大よそ佛道に入るには、先づ誠の心をおこすべし。其心誠ならずば、その道すゝみがたし。誠に深く淨土を願ふ心なきを、人にあふては

深く願ふよしを云へ、内心には深く今生の名利に著しながら外相には世をいどふ由をもてなし、外には善心あり尊き由をあらはして、内には不善の心もあり放逸の心もあるなり。これを虚假の心と名づけて眞實心にたがへる相とす。これをひるがへして眞實心をば心得つべし。この心を悪しく心得たる人は、萬の事ありのままならずば、虚假になりなんすとて、身に取りてはばかるべく、恥がましき事をも人にあらはし知らせて、却て放逸无慚のどがをまねかんとす。今眞實心と云ふは淨土を求め穢土をいとへ、佛の願を信すること、眞實の心にて有るべしとなり。必ずしも恥をあらはにし、どがを示せどには非ず。ことにより折に従ひて深く斟酌すべし。二つには深心と云ふは信心なり先づ信心の相を知るべし。信心と云ふは深く人の言葉をたのみて疑はざるなり。例へば我ためにいかにも腹黒かるまじく深くたのみたる人の、まのあたりよく見たらん處を教へんに、其處には山あり、かしこには川ありと云ひたらんを、深くたのみて其言葉を信じてむ後に、

又人ありて、それはひがごとなり山無し川無しと云ふとも、いかにもそらごとしまじき人の云ひてし事なれば、のちに百千人の云はん事をば用えず、元聞きし事を深く頼む、是を信心と云ふなり。今釋迦の所説を信じ、彌陀の誓願を信じて、二心無き事又斯の如くなるべし。今此信心につきて、二つあり。一つには我身は罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常にしづみ、常に流轉して出離の縁有る事なしと信す。二つには決定して深く阿彌陀佛の四十八願、衆生を攝取し給ふ事を疑わざれば、彼の願力に乗りて定めて往生する事を得と信するなり。世の人常に曰く、佛の願を信せざるにはあらざれ共、我身の程をはかろうに、罪障の積れる事は多く、善心のをこる事は少し、心常に散亂して一心を得ることかたし、身こしなへに懈怠にして精進なる事無し。佛の願深しと云ふとも、いかでか此身を迎へ給はんと。此思誠にかしこきに似たり。憍慢をおこさず高貢の心無し。しかはあれども佛の不思議力を疑ふとが有り、佛いかばかりの、力ましますと知りてか、

罪惡の身なれば救われがたしと思ふべき。五逆の罪人すら尙十念の功によりて、刹那のあひだに往生をさぐ。況んや罪五逆に至らず、功十念に過たらんをや。罪深くば愈々極樂を願ふべし。不簡破戒罪根深と云ひり。善少くば愈々彌陀を念すべし。三念五念佛來迎との給へり。むなしく身を卑下して、心を怯弱コニヤクにして佛智不思議を疑ふ事なかれ。例へば人有りて、高き岸の下にありて登る事あたはざらん、力強き人岸の上にありて、つなをおろして、このつなに取り付かせて、我岸の上にひきのぼせんと云わんに、引人の力を疑ひて、つなの弱からん事をあやぶみて、手をおさめて是を取らずば、更に岸の上に登る事を得べからず。偏にその言葉に従ふてたなごころを、のべて是を取らんには、即ち登る事を得べし。佛力を疑ひ願力を頼まざる人は、菩提の岸に登る事難し。たゞ信心の手をのべて、誓願のつなを取るべし。佛力无窮なり。罪障深重の身をおもしとせず。佛智无邊なり、散亂放逸のものをも捨つる事なし。たゞ信心を要とす。其の外はかいり見ざ

るなり。信心決定しぬれば三心自らそなわる。本願を信すること誠あれば虚假の心なし。淨土をまつ事疑ひなければ、廻願の思あり。此故に三心異なるに似たれ共皆信心にそなはれるなり。三つには廻向發願心と云ふは、名の中に其義きこえたり、くわしく是をのぶべからず、過現三業の善根を廻らして極樂に生れんと願するなり。

次に本願の文に曰く、乃至十念、若不生者、不取正覺と云へり、今十念と云へるも何の故か十返の名號と心得んと、此疑を釋せば、觀无量壽經の下品下生の人の相をさくに曰く、五逆十惡を造り諸々の不善を具せるもの、臨終の時に至りて、初めて善知識のすゝめによりて、僅かに十返の名號を唱へ、即ち淨土に生ると云へり。是れ更に靜かに觀じ深く念するにあらず、たゞ口に名號を稱するなり。汝若シ不能ハズ念ズ者ト云へり、是れ深く思はざるむねを顯すなり。應ニ稱ニ無量壽佛トとぞけり。たゞ深く佛名をとなふべしと勸むるなり。具ニ足シテ十念ニ稱ニ南无阿

彌陀佛、稱_二佛名_一故、於_三念念_二中_一、除_三八十億劫_二生死之罪_一と云へり、十念と云へるはたゞ稱名の十返なり、本願の文是れになすらへて知りぬべし。善導和尚は深く此むねをさとりて、本願の文をの給ふに、若我成佛十方衆生、稱_三我名號_二下_一至_三十聲_二、若_レ不生_レ者_レ、不_レ取_三正覺_二と云へり。十聲と云へるは口稱の義を顯わさんとなり。

次に念佛を信する人の曰く、往生淨土の道は信心を先とす。信心決定しぬるにはあながちに稱名を要とせず、經にすでに乃至一念とけり此故に一念にてたれりとす。返數を重ねんとするは、却りて佛の願を信せざるなり、念佛を信せざる人として、大いにあざけり深くそしるゝと、光づ専修念佛と云ふてもろくの大乗の修行を捨て、次に一念の義をたてゝ、自ら念佛の行をやめつ、誠に是れ魔界たりを得て、末世の衆生をたぶらかすなり。此の二つの説共に得失あり。往生の業一念にたれりと云ふは其理誠に然るべしと云へども、返數を重ねるは不信なりと

云ふ、すこぶる其ことはすぎたりとす。一念を少なしと思ひて、返數を重ねずば往生し難しと思はば、誠に不信なりと云ふべし。往生の業は一念にたれりといへども、いたづらに明し、いたづらに暮すにいよく功を重ねん事要に非ずやと思ふて、是を唱ひば、ひめもすに唱ひ、夜もすがら唱ふとも、いよく功德をそへますく業因決定すべし。善導和尚は力のつきざるほどは、常に稱名すと云へり是を不信の人とや云わん、ひとへに之をあざける者又然るべからず。一念と云へるは既に經の文なり、之を信せぬは佛語を信せざるなり、此故に一念決定しぬと信じて、然も一生おこたり無く申すべきなり、是れ正義とすべし。念佛の要義多しといへども、略してのぶる事、斯の如し。是を見ん人定めてあざけりをなさんか、然れ共、信謗ともに因として、皆正に淨土に生るべし。今生夢の内の、ちぎりをしるべとして來世の悟りの前の縁を結ばんとなり。我おくれば人に導かれ我先だゞば人を導かん、生々に善友となりて互に佛道を修せしめ世々に知識としてともに迷執をたゞん。(聖覺法印作)

後世物語

ちかごろ浄土宗の明師をたづねて、洛陽東山のほとりにまします禪坊にまいりてみれば十四五人ばかりならびゐて、いかにしてか、このたび往生ののぞみをとぐべきと、これをわれも／＼とおもひおもひに尋ね申しし時しも参りあひて、幸に日頃の不審こと／＼くあきらめたり。そのおもむきをたちどころにしるしてゐなかの在家无智の人々のためにくだすなり、よく／＼心をしづめて御覽すべし。

或人問ていはく、かゝるあさましき无智のものも念佛すれば極樂に生ずとうけたまはりて、其後ひとすちに念佛すれども、まことしく、さもありぬべしと思ひ定めたることも候はぬをば、いかゞ仕るべきと。

師答へていはく、念佛往生は、もとより破戒无智のものゝためなり。もし智慧もひろく、戒をも完くたもつ身ならば、いづれの教法なりとも修行して、生死をはな

れ菩提をうべきなり。それが我身にあたはねばこそ、いま念佛して往生をば願へ、また或人問ていはく、いみじき人のためには餘教をとき、いやしき人のためには念佛をすゝめたらば、聖道門の諸教はめでたく、浄土門の一教はをとれるかと申せば。

師こたへて曰く、たごひ彼は深く、これは浅く、かれはいみじくこれはいやしきとも、我身の分にしたがひて、流轉の苦をまぬかれて、不退の位を得なば、さてこそあらめ、深き浅きを論じてなにかわせん、いはんや彼のいみじき人々のめでたき教法をさとりて佛になると云ふも、このあさましき身の念佛して往生すといふもしばらく、いりかどは、まち／＼なれども、をちつくところは一つなり善導のたまわく、八萬四千の門、門々不同にしてまた別なるにあらず、別々の門は却て同じといへり。然ば即ち皆これ同じく釋迦一佛の説なれば、いづれをまされりいづれを、をとれりといふべからず、智慧も深く戒行もいみじからん人はい

づれの法門にいりても、生死を解脱せよかし。みな縁にしたがひて、心のひくかたなれば、よしあしと人のことをば、さたすべからず、たゞわが身の行を、はからふべきなりと。

又或人問ふて曰く、念佛すとも三心をしらでは、往生すべからずと候なるは、いかがし候ふべきと。

師の曰くまことにしかなり。たゞし故法然聖人のおほせごとありしは、三心をしれりとも念佛せずばその詮なし。たとひ三心を知らずとも念佛だに申さば、そらに三心は具足して極樂には生ずべしと仰せられしを、正しくうけたまわりしこと此のころえ、あはすれば、まことにさもおぼえたるなり。

或人曰く、念佛すれども、心に妄念ををこせば、外相はたふとくみえ、内心はわろきゆへに虚假の念佛となりて眞實の念佛にあらずと申す。

師の曰く、そのころち、即ち自力にかへられて他力をしらす、すでに至誠心

のかけたりけるなり。これをころうべき様は、今の凡夫自ら煩惱を斷ずることかたければ、妄念またとごめかたし、然るを彌陀佛これをかながみて、かねてかゝる衆生のために、他力本願をたて名號の不思議にて衆生の罪を除かんと誓ひたまへり。さればこそ他力とも名けたれ。このことはりを心得つれば、我心にて、ものうるさく妄念妄想を止めんともたしなまず、しづめがたき悪しき心亂れちる心をしづめんとも、たしなまず、ころしがたき觀念觀法をころさんとも、はげます、たゞ佛の名願を念持すれば本願かぎりある故に、貪瞋癡の煩惱をたゞへたる身なれども必ず往生すと信じたればこそ、ころえやすけれ。さればこそ易行道とは名づけたれ。もし身をいましめ。心をころのへて修すべきならば、なんぞ行往坐臥を論せず、時處諸縁をきはらずと、すゝめんや、又もしみづから身をころのへ、心をすましおほせて、つとめば、必ずしも佛力を頼ずとも生死をはなれなんと。

又或人曰く肝要をとりて、三心の大意をうけたまはり候はんと。

師の曰く、まことにしかるべし、まづ一心一向なるこれ至誠心の大意なり。我身の分をはからひて、自力をすて、他力につくころの、たゞひとすぢなるを眞實心と云ふなり。他力をたのまぬ心を虚假の心と云ふなり。つぎに他力をたのみたる心の深くなりて、疑なきを深心の大意とす。いはゆる彌陀の本願は、すべともとより罪惡の凡夫のためにして、聖人賢人のためにあらずと心得つるは我身の惡きにつけても、更に疑ふ思の無きを信心と云ふなり。つぎに本願他力の眞實なるに入りぬる身なれば、往生決定なりと思ひ定めて、ねがひ得たる心を廻向發願心と云ふなり。

又或人申さく念佛すれば、しらざれども、三心は、そらに具足せらるゝ候はその様はいかに候やらんと。

師の答へて曰く餘行をすて、念佛するは阿彌陀佛をたのむ心の一筋なるゆへ

なりこれ至誠心なり。名號を稱るは疑ひなきゆへなり、これ信心なり、名號を稱るは往生をねがふ心のをこる故なり、これ廻向發願心なり。是れ等ほどの心得はいかなるものも念佛して、極樂に往生せんと思ふ程の人は具したるゆへに、无智のものも、念佛だにすれば、三心具足して往生するなりたゞ詮するところは、我身はもとより煩惱具足の凡夫なれば、初めて心の惡しども、善しどもまたすべからず。一筋に彌陀をたのみ奉りて、疑はず往生を決定と願ふて申す念佛は、すなはち三心具足の行者とするなり。しらねども稱ふれば自然に具せらるゝと、聖人のおほせごとありしは此のいわれありける故なりと。

又或人の曰く、名號をとなふる時に、念々ごとにこの三心の義を、存じて申すべく候やらんと。

師の曰く、その義全くあるべからず、一たび心を得つるのちには、たゞ南無阿彌陀佛ととなふるばかりなり。三心すなはち稱名の聲にあらわれぬるのちには、三心の義を心の底にもとむべからずと。(作者不詳)

自力他力

念佛の行につきて、自力他力と云ふことあり。これは極樂をねがひて、彌陀の名號を稱する人の中に、自力の心にて念佛する人あり。まづ自力の心といふは身にもわろきことをせじ、口にもわろきことをばいはじ、心にもひがごをばおもはじと、かやうにつくしみて、念佛するものは、この念佛の力にて、よろづの罪を除き失ひて、極樂へ必ずまいるぞと思ひたる人をば、自力の行といふなり。かやうにわが身をつくしみてのへて、善からんと思ふは、めでたけれども、まづ世の人をみるに、いかにもくおもふさまに、つくしめんことは、きはめてありがたきことなり。そのうへに、彌陀の本願をつやくとしらざるとがのあるなり。さればさきのごとく、身をも心をも、いみじくして往生する人も、まさしき本願の極樂にはまいらずして、わづかにそのほどりへまいりて、そのところにて本願

にそむきたる、自力疑心のつみをつぐのひてのちに、まさしき極樂には生ずる也これを自力の念佛とはまふす也。

他力の念佛と申は、わが身のをろかに、わろきにつけても、かゝる身にてこそたやすくこの娑婆世界を、いかゞはなるべき、罪は日々をそえてかさなり、妄念は常にをこりてとどまらず。かゝるにつけても、ひとへに彌陀の誓をたのみあふぎ念佛をこたらざれば、阿彌陀佛かたじけなく遍照の光明をはなちて、この身を照しまもせたまへば、觀音勢至等の無量の聖衆ひき具して、行住坐臥もしは晝もしは夜、一切の時と處をきはらず、行者を護念して、目しばらくも、すてたまはずまさしく命つき息たえん時には、よろづの罪をばみなうちけしてめでたきものにつくりなして、極樂へゐてかへらせおはします也。されば罪のきゆることも南無阿彌陀佛の願力也。めでたき位をうることも南無阿彌陀佛の弘誓の力也。ながくとをく三界を出んことも阿彌陀佛の本願の力也。極樂へまいりて、のりを聞き

覺悟をひらき、やがて佛にならんとすることも、阿彌陀の御力らなりければ、ひとあゆみも、我力にて極樂へまいることなしと思ひて、餘行をまじへずして一向に念佛するを、他力の行とは申すなり。

たとへば腰をれ、足なへてわが力にてたち上るべき方もなし。まして、はるかならんころへゆくことは、かけても思ひよらぬことなれども、たのみたる人のいとをしと思ひて、さりぬべき人あまた具して、力者に興をかゝせて、むかへにきたりて、やはらかにのせてかへらんする、十里二十里の道も、やすく野をも山をも、ほごなくすぐるやうに、われらが極樂へまゐらんと思ひたちたるは、つみふかく煩惱あつければ、腰をれ、足なへたる人々にもすぐれたり。唯今にても、死するものならば、あした、夕につくりたる罪のをもければ、かうべをさかさまにして、三惡道にこそは、おちいらんするものにてあれども、一すじに阿彌陀佛の誓をあふぎて念佛して疑ふ心だになければ、必ずく唯今ひきいらんする時阿彌

陀佛目の前にあらはれて罪みと云ふ罪をばすこしも残ることなく功德と轉じかへなして、無漏無生の報佛報土へ、あてかへらせおわしますと云ふことを、釋迦如来ねんごろにすゝめおわしましたることを、深くたのみて、二心なく念佛するをば他力の行者とまうすなり。

かゝる人は十人は十人、百人は百人ながら、往生することにて候なり、かゝる人をやがて一向專修の念佛者とは申すなり。おなじく念佛をしながら、ひとへに自力をたのみたるは、ゆるしき、ひがごとにて候なり、あなかしこく。(隆寛律師作)

名號を執持すること、若は一日若は七日、一心にして亂れざれば、其人命終の時に臨みて、阿彌陀佛諸の聖衆と與に現じて其前に在さん、心顛倒せずして、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得ん。

(阿彌陀經)

七、慈 誨

親鸞聖人八十歳御文

一

御文度々参らせ候ひき御覽せすや候ひけん。何事よりも明法御房の往生の本意
とげておはします候こそ、常陸國うちの是れに志おはします人々の御爲に目出度
事にて候へ。

往生はともかくも凡夫の計はからひにてすべき事にて候はず、目出度き智者も計ふべ
き事にも候はず、大小の聖人だにも、ともかくも計はで唯願力に任せてこそおはし
ます事にて候へ。まして各々の様におはします人々は、唯此誓ありとさき々南無阿
彌陀佛にあひまいらせ給ふこそ難有く目出度く候御果報にては候ふなれ、とかく

計はせ給ふ事ゆめく候べからず。

さきに下し参らせ候ひし唯信鈔、後世物語、自力他力なんごの文にて御覽候ふ
べし、それこそ此世にとりては善き人々にておはします。既に往生をもしておは
します人々にて候へば、其文ごにも書かれて候には何事もくすぐべくも候はず
法然聖人の御教をよくく御心得たる人々にておはしますに候ひき、さればこそ
往生も目出度くしておはしました候へ。

二

年頃念佛申しあひ給ふ人々の中にも、偏に我思ふさまなる事をのみ申しあはれ
て候人々も候ひき。今もさ候らんと覚え候。明法房などの往生して、おはします
も、もとは不可思議のひがごを思ひなんごしたる心をも、ひるがへしなんごし
てこそ候ひしか。

われ往生すべければとて、すまじき事をもし、思ふまじき事をも思ひ、云ふまじき事をも云ひなどする事はあるべくも候はず。貧欲の煩惱にくるはされて欲もおこり。瞋恚の煩惱にくるはされて、ねたむべくもなき因果を破る心もおこり。愚痴の煩惱に惑はされて、思ふまじき事なども起るにてこそ候へ。めでたき佛の御誓のあればとて、わざとすまじき事どもをもし、思ふまじき事どもを思ひなごせんは、よくよく此世の厭はしからず、身のわろき事を思ひ知らぬにて候へば念佛に心ざしもなく佛の御誓にも心ざしのおはしまさぬにて候へば、念佛せさせ給ふとも、その御心ざしにては順次の往生もかたくや候べからん、よくよく此由を人々に聞かせ參らせ候べく候。かやうにも申すべくも候はねども、何となくこの邊の事を御心にかけてあはせ給ふ人々にて、おはしましあひて候へばかくも申し候なり。

三

年頃念佛して往生ねがふしるしには、もと悪しかりし我心をも思ひかへして、友同朋にもねんごろに心のおはしましあはごこそ、世を厭ふしるしにても候はめごこそ覚え候へ、よくよく御心得候べし。善知識ををろかに思ひ師をそしるものをば謗法のものごまふすなり、親をそしるものをば五逆のものごまふすなり、同坐せざれと候なり。されば北の郡に候へし善證房は親をのり善信をやうよくにそしり候ひしかば、近づきむつまじく思ひ候はで近づけず候へき。明法御房の往生のことを聞きながら、あごををろかにせん人々は其同朋にあらず候べし。

無明の酒に酔ひたる人に愈々酔をすゝめ、三毒を久しく好み食ふ人に、愈々毒をゆるして好めと申しあふて候らん、不便の事に候。無明の酒に酔ひたる事を悲しみ、三毒を好み食ふて未だ毒も失せはてず、無明の酔もいまださめやらぬに、

おはしましあふて候ぞかし、よくよく御心得候べし。

四

方々よりの御志のものごも数のまゝに慥に賜り候、明教房ののぼられて候こと難有きことに候、方々の御志申し盡し難く候。明法御房の往生の事驚き申すべきにはあらねども、かへすく嬉しく候、鹿島なめかた奥郡かやうの往生願はせ給ふ人々のみな御喜にて候。また平塚の入道殿御往生の事聞き候こそ、かへすく申に限りなく覺え候へ目出度さ申し盡すべくも候はず、各々みな往生は一定とおはしめすべし。

五

法然聖人の御弟子の中にも我はゆゑしき學生なごと思ひあひたる人々も、此世

には皆やうくに法文をいひかへて、身もまごひ人をもまごはして、わづらひあふて候めり。聖教の教をも見ず知らぬ各々の様におわします人々は、往生に障りなしとばかり云ふをききて、悪しざまに御心得ある事多く候ひき、今もさこそ候ふらめと覺え候。淨土の教もしらぬ信見房などが申す事によりて、ひがさまに愈なりあはせ給ひ候らんをきく候こそ、あさましく候へ、先づ各々の昔は、彌陀の誓をもしらす阿彌陀佛をも申さずおはしまし候ひしが、釋迦彌陀の御方便に催されて、今彌陀の誓をも聞きはじめておはします身にて候なり。もごは無明の酒に酔ひて貪欲瞋恚愚痴の三毒をのみ好み召しあふて候ひつるに、佛の誓を聞きはじめしより無明の酔もやうく少しづつさめ、三毒をも少しづつ好ずして、阿彌陀佛の薬を常に好み召す身となりておはしましあふて候ぞかし。然るになを酔もさめやらぬに重ねて酔をすゝめ、毒も消えやらぬになを毒をすゝめられ候らんこそあさましく候へ、煩惱具足の身なればさて、心にまかせて身にもあまじき事をも

ゆるし、口にも云ふまじき事をもゆるし、心にも思ふまじき事をもゆるして、いかにも心のまゝにてあるべしと申しあふて候らんこそ、かへすく不便に覺え候へ。酔もさめぬさきになを酒をすゝめ、毒も消えやらぬに愈毒をすゝめんが如し、藥あり毒を好めと候らん事はあるべくも候はずこそ覺え候。

六

佛の御名をもきく念佛を申して久くなりておはしまさん人々は、後世の悪しき事を厭ふしるし、此身の悪しき事をば厭ひすてんと思召すしるしも候べしとこそ覺え候へ。

はじめて佛の誓をきくはじむる人々の、吾身の悪ろく心の悪ろきを思ひ知りて此身の様にてはなんぞ往生せんずると云ふ人にこそ、煩惱具足したる身なれば、吾心の善惡をば沙汰せずむかへ給ふぞとは申候へ、かく聞きてのち佛を信せん

思ふ心深くなりぬるには、誠に此身をも厭ひ流轉せん事をも悲しみて、深く誓をも信じ何彌陀佛をも好み申しなんごする人は、もどこそ心のまゝにて惡事をもふるまひなんごせしと、思召しあはせ給はゞこそ世を厭ふしるしにても候はめ。

七

また往生の信心は釋迦彌陀の御すゝめによりて起るとこそ見えて候へば、さりとも眞まことの心おこらせ給ひなんには、いかでかむかしの御心のまゝにては候べき、此御なかの人々も少々は悪しきさまなる事のきこえ候ふめり。師をそしり善知識をかるしめ同行をもあなづりなんごしあはせ給ふ由、きく候こそあさましく候へすでに謗法の人なり五逆の人なり、なれむつぶ可らず。淨土論と申す文には、かやうの人は佛法信する心のなきより此心は起るなりと候めり。また至誠心のなかにはかやうに惡を好まんには、慎んで遠ざかれ近づくべからずとこそ説きをかれ

て候へ。

悪を好む人にも近づきなごすることは、浄土に参りてのち衆生利益にかへりてこそ、左様の罪人にも従ひ近づく事は候へ、それも我が計にはあらず、彌陀の誓によりて御助にてこそ思ふさまのふるまひも候はんすれ、よく／＼案せさせ給ふべく候。往生の金剛心の起ることは佛の御計より起りて候へば、金剛心をとりて候はん人は、よも師をそしり善知識をあなづりなんごする事は候はじとこそ覺え候へ。

此文を以て鹿島なめかた南の莊何方も、是れに志おわしき人人には、同じ御心に讀みきかせたまふべく候あなかしこく。(末燈鈔)

建長四年二月廿四日

八、跋

—

佛道と人道は判然區別せなければならぬ。佛道は永遠の道であり人道は人間生活上の道でありて、是を混交いたしますれば、どうしても徹底境に進む事が出来ないであります。然し兩者の間には密接な関係のある事は申すまでもなき事でありますが、それは今の所論でありませぬから略します。

佛の御教は一言にして盡せば、宇宙人生の眞實相を詳説して、迷と悟との原因結果を明かにして、一切人をして永遠無窮に亘りて大覺の妙境に到達せしめんとするにある。

然るに私供には、そんな事は殆ど夢妄想の如く思はれ、却て眼前の人生問題が

力強くまた有意義にも感ぜらるゝのであります。それは畢竟人間意識を構成してをる自我觀念中に自己を中心として五感の經驗界に觸れ得るもののみを、眞實の實在として執着する有の邪見と、同時に、過去未來現在を一貫する三世因果の事理を否定する無の邪見との爲でありて、佛の教が容易に解し得られないのも無理はないのであります。

邪見とは因果の理と事とを疑ふ心を申しますので、もと因果律は天地自然の大道であるのに、それに反するのですから邪の見解と申さなければなりません。また此因果法を信するを正見と申します。そこで佛敎の入門は、先づ此天地の大道を信じ三世因果の信を確立するにあるのであります。かの宗教の問題と云へば、必ず誰にも發せらるゝ佛の存在、地獄極樂の有無、靈魂滅不滅等の疑問も、三世因果の信仰がい確立すれば自然と解くるのでありて、因果の信は大道を知見する心眼なのであります。眼なくして物の存在不存在を論ずる程無詮な事はないので

ある。

然れば如何にせば其信を確立し得るかと謂へば、つとめて善事に親しみ常に御念佛を勵みますれば、必ず佛の念力と念佛の威徳力とによりて有無の邪見が破れて、三世因果の信が自然と確立するのである、眞實の教ならば必ず修行がなければなりません、念佛は他方の修行でありて、是を勉め修すれば、どんな無信の人でも必ず因果の信を確立し得るのである、第十九願の願意に添ふからであります。

第一章第二章は常に釋尊の大法に接し、大道を知見するの信念を増長せしめんが爲めに謹録いたしました。

二

佛敎の本旨は轉迷開悟出離解脫の要法である事は前述の如くですが、然らば其

迷を轉じ悟を開くと云ふ事はどう云ふ事であるかと云ふに、此地上にありては釋尊の如く、靈界に入りては阿彌陀佛の如く、絶對無上の智慧圓滿の極位に昇る事を申すので、是は廣大な事で到底人間の理智を以て知る事の出來ぬ境界であります。然るにやゝもすれば、此廣大無限境を吾々常識限内に引き下して、色々に道理もつけ人間生活の一境地として味はんとするのでありますが、是は最も怖るべき誤りでありて、絶對無限境は到底有限相對境に居る私供には判らぬのであります。人間は唯ぞ地上の佛陀（覺者）大聖釋尊の大法を正信し、如實に修するより外に眞實の道を辿り得ないのであります。眞面目に道を求め進むものには、必ず此事が實際に知られて來るのである。人間の智慧や能力やは生死の大問題を究むるには誠に哀れ千萬なもので、先聖の指教を離れては一步も行けるものではありません。

出離の目的を達するに其方法が聖淨二門と分れる。淨土門では最後の理想は阿

彌陀佛の御淨土に往生して果すのであります。そこで往生と云ふ事が重大な問題となるのであります。第二章以下は全く此往生問題解答の爲めに聖訓を収録いたしました。往生問題こそは一切人の眞實の歸趣であり、第一義でありますから、此第一義の問題にさい専心にうち込んで行けば、必ず第二義の人生問題も自然に解決するのでありて、本治りて末の治まらぬ道理はないのであります。

三

一。惠琳講師ある病僧に遣はさるゝ消息に。

彌陀の本願と申すは、名號をとなへんものをば、極樂へむかへんと誓はせ給ひたるを、深く信じて稱ふるがめでたき事にて候なり。一向名號を稱ふとも信心あさくば往生しがたく候。されば念佛往生とふかく信じて、しかも名號をとなへんするは、疑なき報土の往生にてあるべく候なり。

「右祖師聖人有阿彌陀佛へ賜はる文の御言なり三部妙典の肝要、三朝列祖のすゝめ、この數語につきすと云ふ事なし余深くこの語を事とす故にこれを書して送るのみ」と。淨土門の一切はこの一見近き淺き御示し中にこもり盡されてをる、能々味ふべきであります。

二。宗祖は彌陀の御本願を出發點として、偏に不可思議の佛智を仰いで本願の名號を念持遊されたのであります。而も少しの私心なく先聖列祖の相承傳繼を重んじ、近くは法然上人を師範とし遡りて善導大師の玄意を承けさせ給ひ、併せて龍、天、曇、綽、源信の列祖に據らせ給ふたのでありて、第三章はその旨を明かにせん爲であり、其源は如來の御本願を明かにいたゞく事にあるのであります。

三。一体元祖法然上人(念佛爲本)と吾祖(信心爲本)との御信仰に相異あるが如く思はゞ大なる謬見でありて、念佛往生と深く本願の御誓を信じて念佛し給ふ上に

(念佛爲本) 無上大涅槃の証果を得る報土往生の眞因たる願力不思議の信心回向を力説し給ふが(信心爲本) 祖意であります。念佛爲本に立脚する信心爲本なる事を忘れてはなりません。一牧起請文と有阿彌陀佛への御消息とを合せ拜讀せば思ひ半ばに過るものがあります。他力金剛信回向の旨は教行信証に最も力強く高調力説してあります。

元祖と宗祖との御化導の差異は、元祖は眞假該通門に據らせ給ひ、宗祖は眞假分判門に據らせ給ふたのであります。また元祖は約法門、宗祖は約機門、或は元祖は要弘對、宗祖は眞弘對の御化導であることも申します。

四。彌陀の本願は念佛するばかりで往生させて被下るこの御思召でありて、是を深く信じ稱へよと佛も念じ給ひば、宗祖も御すゝめあらせらるるのであります。念佛するより外に凡夫が後世助かる道はない、念佛するばかりで助かること云ふ事は偏に如來念力の然らしむる處、また名號の不思議力でありて、全く佛智の不思

議であります。それ故明かに本願に稱我名字と願じさせ給ひて、我名を稱ふるもの若し生れずば正覺を取らじと誓はせ給ふたのであります。其如來の御誓が信の目標となるから、念佛するばかりで往生の大事を如來に乗托する事が出来るのである。親鸞にをきては唯だ念佛して、彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰を蒙りて信する外に別の仔細なきなりとは、此點を御喜びあらせられたのでありて、稱ふるばかりで助くるの勅命であると、本願の御誓が明かに信じられて見れば、實に不可思議の佛智と仰いで、計なく唯だ勅命に信順して念佛するばかりであります。

念佛一行、稱我名字と、如來本願の御誓に腹が坐り御念佛が稱へらるゝ身となりた上で宿善開發の機には金剛信を回向せしめ給ひて、眞實報土往生の正因となさしめ給ふのであります。然らざるものは無明猶ほ存するが故に、不了佛智の罪により方便化土に生るゝのであります。次に稱我名字の御誓なる事を知らず

唯だ如來の他方で助かる御慈悲で救はるゝ是が本願の不思議であるなごと、自分の感想で信仰を立てゝをるものは、十九二十八の三願いづれにも、かなはざれば次生の往生覺束なきの人と謂はねばならぬ、此點は深く私心を去りて如來本願の御思召を一大事とうち込んで聞かねばなりません。

五。蓮如上人御文の御化導につき世人の惑あれば一言申さねばなりません。それは御文には一ヶ所も念佛稱ふるのを救ふとの御言葉なし、唯だ如何なる罪深きものも如來の助け給ふぞと疑はず、深く佛を頼めば佛必ず助け給ふとのみ御すすめなり、また世上かくの如く心得るもの多き様なれども是れは御文の御化導に暗きより起る大きな誤りで、御一代聞記にもある如く御文は安心の鏡とあれば如來の稱ふばかりで助くるとの勅命御慈悲を、如何に吾が心に受くべきか如何様に此機に受得すべきかと云ふ、凡夫の安心を御指圖被下るゝ鏡なれば如來の口稱本願が略してあるのであります。

また稱我名字は本願の誓なれば念佛門の通義で、獨り我真宗のみならず西山鎮西皆然らざるはない。然るに其稱ふるものを救ふこの勅命を吾機に受得する安心について淨土、一家の流義區々に分れたれば、當流では開山聖人相傳の一義は信心一つに限れりと他力回向の信と云ふ事を御傳へ被下るが當家の所詮、その心ばいが即ち安心なり。念佛するものを助くる御本願なれば、稱ふれば助かるは當然の様に心得るのではない、ごうしても助かれんものが念佛するばかりで助け給ふと云ふは全く不思議の本願力なれば、かゝる罪業深きものを助け給ふは阿彌陀如來ばかりなりと、深く如來を頼みてその恩を喜びて念佛勵めと、念佛の申し心、本願を信する信じ様を教へ給ふが御文の他力安心を示し給ふの御精神なりと窺はねばならぬと先輩は指南されてあります、それ故御文はごこまでも稱我名字の口稱本願の旨を承知した上での信心沙汰と心得ねばなりません、そうでないと全く無行他力となりて、易行易修の他力本願の御思召が隠れてしまうのであります。故

に御文には雜行を捨て、正行に歸せよとか、念佛門とか、念佛行者など仰せられて口稱本願の土臺を明かに示してをかせらるのであります。

六。教行信証六卷は完祖の眞髓を傳へさせられた御聖教でありて、出離に志あるものの終世手を離してはならぬ大切な聖訓であります。妙音院了祥師は一切經は教行信証六卷に攝まり盡し、教行信証六卷また百二十句の正信偈に攝まり、百二十句また本願名號正定業至心信樂願爲因の二句に攝まり、二句また正信念佛の四字の題號に攝まるご申された。誠に聖人の髓を得させられた至言であります、佛智不思議の念佛を正信するばかりで、往生の大問題が解決さるのであります。偏に本願力名號不思議ご戴かねばなりません。

尙教行信証化卷に開示し給ふ方便の願意は、深き如來の御思召のあらせ給ふ處であり、宗祖また身讀体现遊されたもので、求道者の深く味はねばならぬ重大な事柄なのであります。

方便とは云ふまでもなく、眞實の爲めの方便でありて、方便なくしては到底眞實は現はれず、また眞實にも入り難いのであります。それ故方便は第二の眞實とも言へるのである。方便の願は十九二十の二願で、眞實は十八願であります。十八願は必ず十九二十の方便の願より入らねばならぬ。方便の願あるが故に弘願眞實に歸し得る事が出来き、宗祖が十九願を要門と名け、二十願を眞門と名け果遂の願とも名け、やがて眞如門に轉入する至要の門戸であるを力説し給ひたる事は、深く佛意を得させ給ひたる往生願求の行人にとりての巨燈でありて如實に是を信受して實踐し修行しなければなりません。

七。唯信鈔、後世物語、自力他力の三部は、何れも宗祖御同門の方々の文でありて宗祖が常に三部の聖教を弟子同明達に御すゝめになりたもので、其人を見んとせば其友を見よとも申せば、宗祖の推奨遊された御聖教に接すれば、とりもなほさず宗祖の御信仰をも同時に窺ひ奉る事が出来るのであります。

四

出離を求むるもので人生生活裡にありて、深く心がけねばならぬ事が二つあるのであります。其一は志佛道にあるが故に、此人生に耽溺せざらん事を堅く用心せねばなりません。第二には人道の實踐を輕んじてはならぬ。それは身の罪惡深重、煩惱熾盛を知ること、因果法を信すること、恩を知らしめらるることの三點が、本願を信するものには根底となるからであります。第一章と第七章は其旨を明かにせんが爲めであります。人道の大地に佛法の幹が生ずるのであります。

しかるに無始よりこのかた、一切郡生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂なし。法爾として眞實の信樂なし。ことをもて無上の功德値遇しがたく、最勝の淨信獲得しがたし。一切凡小、一切時中に貧愛の心、つねによく善心をけがし、瞋憎の心、つねに

よく法財をやく、急作急修して頭燃をはらふが如くすれども、すべて雜毒雜修の善となづく。また虛假諛僞の行となす。眞實の業となづけざるなり。この虛假雜毒の善をもて、無量光明土に生せんと欲するこれかならず不可なり。なにを以ての故に、まさしく如來菩薩の行を行じたまひしとき三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋まじはることなきに由てなり。この心はすなはち如來の大悲心なるが故に、かならず報土の正定の因となる。しかるに微塵界の有情、煩惱海に流轉し、生死海に漂没して、眞實の廻向心なし、清淨の廻向心なし。この故に如來一切苦惱の郡生海を矜哀して菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、乃至一念一刹那も廻向心を首として大悲心を成就することをえたまへるがゆへに、利他眞實の欲生心をもて、諸有海に廻施したまへり。欲生すなはちこれ廻向心なり。これすなはち大悲心なるが故に疑蓋まじはることなし。こゝをもて本願の欲生心成就の文經にのたまはく、至心に廻向したまへり。彼國に生せんと願すれば、即ち往生をえ不退轉に住す。

大正十年七月十六日印刷
大正十年七月二十日發行

【非賣品】

新潟縣西蒲原郡味方村大字味方
二千五百七十三番地

編輯兼發行者 富岡教雲

新潟縣新潟市東堀前通九番町九番戸

印刷者 高橋ルイ

聖德太子十七憲法二曰

篤く三寶を敬へ、三寶とは佛と法と僧となり、
則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何世何人か
是の法を貴ばざらん。人もつとも悪なるは鮮し、
能く教ゆれば乃ち化す、それ三寶に歸せずんば
何を以て枉れるを直くせん。

392
212

終

